

平成16（2004）年度

鳥取市内遺跡発掘調査報告書

善田傍示ヶ崎遺跡
青谷上寺地遺跡
河原下飯田所在遺跡
大坪岸ノ上遺跡

2005

鳥取市教育委員会

序 文

この報告書は、開発事業に伴い、国庫補助金及び県補助金を受けて、平成15年度及び平成16年度に実施した旧青谷町内遺跡の試掘調査記録です。

鳥取市青谷町は自然環境に恵まれ、東西の丘陵に挟まれた地域には、有形・無形の文化遺産が数多く残っています。特に平成10年度から実施されてきた青谷上寺地遺跡の発掘調査では、弥生時代の祭祀場跡、優れた木製品、鉄製品など弥生時代のイメージを一新させる重要な発見が相次いでいます。中でも脳の発見は世界中でも数例しかなく、これから研究の成果が期待されます。

近年は、社会の進展に伴って、各種開発事業が計画・実施され、さらに増加する傾向にあります。文化財保護を推し進めている私共といたしましては、こうした開発と文化財の共存を図るべく諸関係機関と協議を重ね、円滑に文化財行政を進めているところです。

この調査にあたっては、青谷上寺地遺跡発掘調査委員会、鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センターをはじめ、関係各位の格別なご指導・ご協力を仰ぎながら、土地所有者や作業員の方々の熱意により、ようやく調査を終了することができました。ここに深く感謝を申し上げる次第であります。

なお、この報告書は不十分な所も多くありますが、私たちの郷土理解に役立てていただくとともに、今後の調査研究の一助となれば幸いです。

平成17年3月

鳥取市教育委員会
教育長 中川俊隆

例 言

- 1 本報告書は、平成15年度及び平成16年度国庫補助金及び県補助金を受けて青谷町教育委員会及び鳥取市教育委員会が実施した旧青谷町内遺跡発掘調査の記録である。
- 2 本発掘調査事業は、学校建設事業に伴う善田傍示ヶ崎遺跡、町営住宅建設及び公共下水道工事並びに中学校改築計画、個人住宅新築計画に伴う青谷上寺地遺跡、排水処理施設建設に伴う河原下飯田所在遺跡、県営ほ場整備事業計画に伴う大坪岸ノ上遺跡の範囲及び性格を確認し、工事との調整を図るために行った試掘調査である。
- 3 善田傍示ヶ崎遺跡のトレンチ番号は平成15年度から通し番号を使用している。
- 4 平成15年度及び平成16年度の善田傍示ヶ崎遺跡及び青谷上寺地遺跡並びに大坪岸ノ上遺跡の植物珪酸体分析及び珪藻分析並びに放射性炭素年代測定は、株式会社 古環境研究所に委託した。
- 5 発掘調査及び報告書作成にあたっては、青谷上寺地遺跡発掘調査委員会、鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センターの指導と協力を得た。
- 6 本書に使用した方位は磁北で、実測図の縮尺は原則として遺構1/40、遺物1/4で示し、土色及び土器類の色調を表すには農林水産技術會議事務局監修「標準土色帳」によった。地図は国土地理院の承認を得て作成された「青谷町全図」の5万分の1の地図を利用した。
- 7 本書における遺構、遺物の略号は次のように示す。
T : ドレンチ SD : 構造遺構 SA : 杭列 P : ピット
- 8 発掘調査で得られた日誌・図面・写真・遺物等は、鳥取市教育委員会で保管する。
- 9 第6章は分析結果をご寄稿いただいたものである。
・年輪年代測定については独立行政法人奈良文化財研究所 光谷拓実先生に玉稿をいただいた。
・青谷上寺地遺跡の植物珪酸体分析及び珪藻分析並びに放射性炭素年代測定は、株式会社 古環境研究所に委託した。

調査関係者

- 調査主体 青谷町教育委員会 鳥取市教育委員会
- 調査団長 中村幸二郎（青谷町教育委員会教育長） 中川 俊隆（鳥取市教育委員会教育長）
- 調査員 森 佳樹（青谷町教育委員会事務局生涯学習係長）
(青谷上寺地遺跡展示館主幹)
加川 崇（青谷町教育委員会事務局生涯学習係主事）
(鳥取市教育委員会文化財課スタッフ)
- 事務局 中字地 幸、森 佳樹、高野 博司、加川 崇、尾崎 仁恵（以上青谷町教育委員会事務局）
中村 英夫、平川 誠、津川ひとみ、佐々木孝文（以上鳥取市教育委員会事務局文化財課）
- 調査指導 赤木 三郎、金原 正明、工楽 善通、高安 克己、辻 誠一郎、深澤 芳樹、（以上青谷上寺地遺跡発掘調査委員会）高橋 学、光谷 拓実、鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センター
- 作業協力 安達 邦彦、伊藤 節子、北島チズ子、久野 英行、小谷 恒子、後藤 正徳、小西 政子、塙 敬寿、陶 克己、清水 鈴枝、鈴木 光頼、田中 清江、田中 志信、椿 勝司、土橋ちか子、橋本 健、長谷川和正、長谷川孝博、長谷川武久、長谷川照高、濱田香代子、濱田佐奈枝、浜本 節也、広沢 博子、房安 君男、森田 博敏、山岡 和子、山下 邦雄

本文目次

第1章 発掘調査の経緯	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第3章 平成15年度調査	5
第1節 善田傍示ヶ崎遺跡	5
第4章 平成16年度調査	10
第1節 善田傍示ヶ崎遺跡	10
第2節 出土遺物について	14
第3節 青谷上寺地遺跡	16
第4節 河原下飯田所在遺跡	21
第5節 大坪岸ノ上遺跡	21
第5章 まとめ	32
第6章 自然科学分析の結果について	34

挿図目次

挿図1 青谷町内の主な遺跡分布図	3
挿図2 善田傍示ヶ崎遺跡トレンチ配置図	5
挿図3 善田傍示ヶ崎遺跡第1トレンチ土層図	5
挿図4 善田傍示ヶ崎遺跡第1トレンチ遺物出土状況	7
挿図5 善田傍示ヶ崎遺跡第1トレンチ出土遺物(1)	8
挿図6 善田傍示ヶ崎遺跡第1トレンチ出土遺物(2)	9
挿図7 善田傍示ヶ崎遺跡第3トレンチ東土層図	10
挿図8 善田傍示ヶ崎遺跡第2トレンチ土層図及び出土遺物	11
挿図9 善田傍示ヶ崎遺跡第4トレンチ出土遺物及び土層図	12
挿図10 善田傍示ヶ崎遺跡第5トレンチ遺物出土状況	14
挿図11 善田傍示ヶ崎遺跡第5トレンチ出土遺物及び土層図	15
挿図12 青谷上寺地遺跡トレンチ配置図	16
挿図13 青谷上寺地遺跡第2、第3トレンチ土層図及び第2トレンチ出土遺物	17
挿図14 青谷上寺地遺跡第3トレンチ出土遺物	19
挿図15 青谷上寺地遺跡第3トレンチ畦畔検出状況	20
挿図16 河原下飯田所在遺跡トレンチ配置図及び平面図	21
挿図17 大坪岸ノ上遺跡トレンチ配置図	23
挿図18 大坪岸ノ上遺跡第1・第4トレンチ平面図及び出土遺物	25
挿図19 大坪岸ノ上遺跡第9トレンチ平面図及び出土遺物	27
挿図20 大坪岸ノ上遺跡第13・第14トレンチ平面図及び出土遺物	28
挿図21 西壁における植物珪酸体分析結果	42
挿図22 北壁における植物珪酸体分析結果	42
挿図23 第1トレンチにおける植物珪酸体分析結果	43
挿図24 第2トレンチにおける植物珪酸体分析結果	44

挿図25	第4トレンチにおける植物珪酸体分析結果	44
挿図26	第5トレンチにおける植物珪酸体分析結果	45
挿図27	青谷上寺地遺跡西壁・北壁における主要珪藻ダイアグラム	47
挿図28	善田傍示ヶ崎遺跡第1トレンチにおける主要珪藻ダイアグラム	50
挿図29	善田傍示ヶ崎遺跡第2トレンチにおける主要珪藻ダイアグラム	50
挿図30	善田傍示ヶ崎遺跡第4トレンチにおける主要珪藻ダイアグラム	51
挿図31	善田傍示ヶ崎遺跡第5トレンチにおける主要珪藻ダイアグラム	51

表 目 次

表1	善田傍示ヶ崎遺跡トレンチ一覧表	6
表2	出土遺物一覧表(1)	30
表3	出土遺物一覧表(2)	31
表4	放射性炭素年代測定一覧表	41
表5	青谷上寺地遺跡の植物珪酸体分析結果	42
表6	善田傍示ヶ崎遺跡の植物珪酸体分析結果	43
表7	青谷上寺地遺跡西壁・北壁における珪藻分析結果	46
表8	善田傍示ヶ崎遺跡における珪藻分析結果(1)	48
表9	善田傍示ヶ崎遺跡における珪藻分析結果(2)	49

図 版 目 次

図版1	善田傍示ヶ崎遺跡第1トレンチ馬形出土状況 善田傍示ヶ崎遺跡第1トレンチ遺物出土状況 善田傍示ヶ崎遺跡第4トレンチ人形出土状況 善田傍示ヶ崎遺跡第5トレンチ畜串出土状況 善田傍示ヶ崎遺跡第5トレンチ土器出土状況 善田傍示ヶ崎遺跡第5トレンチ完掘状況 青谷上寺地遺跡第2トレンチ完掘状況
図版2	青谷上寺地遺跡第3トレンチ畔検出状況 大坪岸ノ上遺跡第1トレンチ遺物出土状況 大坪岸ノ上遺跡第4トレンチ完掘状況 大坪岸ノ上遺跡第9トレンチ完掘状況 大坪岸ノ上遺跡第9トレンチ南土層 大坪岸ノ上遺跡第9トレンチ遺物出土状況 河原下飯田所在遺跡完掘状況
図版3	善田傍示ヶ崎遺跡第1トレンチ出土遺物
図版4	善田傍示ヶ崎遺跡第2・第4トレンチ出土遺物 善田傍示ヶ崎遺跡第5トレンチ出土遺物 大坪岸ノ上遺跡第4トレンチ出土遺物
図版5	大坪岸ノ上遺跡第9トレンチ出土遺物

第1章 発掘調査の経緯

平成15年度

(1) 善田傍示ヶ崎遺跡

善田傍示ヶ崎遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地となっていた。

今回の調査は町教育委員会から統合小学校建設計画の協議がなされ、県教育委員会事務局文化課、埋蔵文化財センター、町教育委員会と協議を行い、試掘調査を実施することとなった。調査は2004年2月10日から2004年3月18日までである。

平成16年度

(1) 善田傍示ヶ崎遺跡

昨年度の調査だけでは遺跡の範囲を確定するには至らなかったため、町教育委員会、県教育委員会文化課及び埋蔵文化財センターと協議を行い、さらに試掘調査を実施し、遺跡の範囲確認を行った。調査期間は2004年4月15日から2004年6月17日までである。

(2) 青谷上寺地遺跡

青谷上寺地遺跡は、平成10年度から発掘調査が実施され、弥生時代の大規模な護岸施設、祭祀場跡などの遺構や多種多量の遺物が発掘されている。しかし、遺跡の性格や範囲はまだ確定しきれてはおらず、現在も継続して範囲確認調査を実施している。

今回の調査は町建設水道課より町営住宅建設計画及び公共下水道工事計画の協議がもたらされ、県教育委員会事務局文化課、埋蔵文化財センター、町教育委員会と協議を行なった結果、試掘調査を実施することとなった。調査期間は2004年6月22日から2004年7月17日までである。

町教育委員会より青谷中学校改築工事計画の協議がもたらされ、県教育委員会事務局文化課、埋蔵文化財センター、町教育委員会と協議を行なった結果、試掘調査を実施することとなった。調査期間は2004年7月26日から2004年8月29日までである。

また個人住宅の建設計画が町教育委員会にもたらされ、県教育委員会事務局文化課、埋蔵文化財センター、町教育委員会と協議を行なった結果、試掘調査を実施することとなった。調査期間は2004年9月2日から2004年9月6日までである。

(3) 河原下飯田所在遺跡

今回の調査は因州和紙協同組合より共同排水処理施設建設計画の協議がもたらされ、県教育委員会事務局文化課、埋蔵文化財センター、町教育委員会と協議を行なった結果、試掘調査を実施することとなった。調査期間は2004年8月24日から2004年8月25日までである。

(4) 大坪岸ノ上遺跡

今回の調査は町産業振興課より日置谷地区県営ほ場整備計画の協議がもたらされ、県教育委員会文化課、埋蔵文化財センター、町教育委員会と協議を行なった結果、試掘調査を実施することとなった。調査期間は2004年11月26日から2005年2月21日までである。

第2章 遺跡の位置と環境

青谷町は、鳥取県の中央よりやや東に位置し、東部地域の西端、旧国名で言えば因幡国に属し、伯耆国との国境にある。この度平成16年11月1日より東部8市町村と合併し、新鳥取市となり、人口約20万2千人、面積約765.66km²と山陰地方最大の都市として変貌を遂げている。また鳥取県内は市町村合併が進んでおり、隣接町も泊村から湯梨浜町に変更となっている。

青谷町地域の南域は標高500mを超す山地で、そこから北へ伸びる溶岩台地が東西を取り囲み境界をなしている。溶岩台地の北端は長尾鼻、オゴノ鼻と続き、30mを超える断崖となって日本海に突出している。また、溶岩台地の東を日置川、西を勝部川が流下し、河口近くで合流し、日本海に注いでいる。合流地点付近に沖積平野、海岸部に砂丘が形成されている。町内の砂浜は、全国的に珍しい鳴り砂の浜として知られている。

旧青谷町内の遺跡は、確認されているものだけでも約480ヶ所あり、その大半は古墳である。また新鳥取市となり遺跡の数は約4,770ヶ所あり、旧青谷町の約10倍に増加している。

今回調査した善田傍示ヶ崎遺跡（A）は青谷町の東側を流れる日置川と露谷川の合流点付近の水田地帯に位置する。周辺には後述する青谷上寺地遺跡（B）のほか、南側丘陵上に善田古墳群（14）、露谷古墳群（13）、大平田城跡（12）が存在する。また調査地は明治43年には場整備がなされているが、丘陵裾部は場整備がなされておらず、旧地形が残っていると考えられる。

今回調査した青谷上寺地遺跡（B）は青谷町の西側を流れる勝部川と東側を流れる日置川の合流点付近に位置する。青谷上寺地遺跡は、1997年から2004年にかけて町による試掘調査が実施され、1998年から2000年にかけて朝島県教育文化財団による発掘調査が、2001年から2004年には鳥取県埋蔵文化財センターによる確認調査が実施されている。その結果、縄文時代晩期から古墳時代にかけての構造が確認されている。中でも遺跡の中心となる弥生時代後期の大規模な腰岸施設や祭祀場跡、水田跡などのほか、当時の生業がわかる鍬・鋤類などの木製農耕具や石包丁、漁労具なども多く出土している。多種多量の遺物はコンテナ2,400箱以上の土器、精巧な作りの木製容器類や大量的建築材、全国最多となる227点のト骨、約270点の鉄製品などが出土している。また、朝鮮半島系の無文土器など外來系の土器、貨泉や鏡、石材などの交流を示す遺物も數多く出土している。弥生時代後期の溝の中から約5,300点にのぼる多量の人骨が出土し、中には殺傷痕のある人骨も確認されている。出土した頭蓋骨3点の中には脳が残っており、今後の研究成果が期待される。

青谷上寺地遺跡の周辺の遺跡としては、前述の露谷古墳群、勝部川を挟んだ沖積平野西側には土師器等が出土した岩本遺跡（33）、東側丘陵上にはほぼ完形の弥生時代中期の壺が出土した青谷第4遺跡（34）、100基以上の古墳からなり、船の線刻が施された吉川43号墳（36）を有する吉川古墳群（35）が存在する。

河原下飯田所在遺跡（C）は青谷町東側を流れる日置川上流の河原集落付近の右岸丘陵裾部に位置する。周辺には山根上式田出土地（24）があり、2001年に試掘調査が実施され、遺構は確認できなかったが、遺物が数点出土している。また丘陵上には山根上式田城跡（25）が存在する。

大坪岸ノ上遺跡（D）は青谷町の東側を流れる日置川上流域にある大坪集落東側水田地帯の中に位置する。周辺の遺跡としては西側丘陵上に1984年に発掘調査が実施され、弥生時代後期から古墳時代にかけての土壙墓や貯蔵穴、竪穴住居跡が確認された大口第1遺跡（18）、弥生時代後期から古墳時代前期初頭にかけての墳丘墓、竪穴住居跡が確認された大口第2遺跡（19）が存在する。また丘陵裾部には1981年に県営は場整備事業に伴い発掘調査が実施され、弥生時代後期から奈良時代にかけての住居跡や古墳が確認されたカヤマ遺跡（21）が存在する。



A	善田傍示ヶ崎遺跡	12	大平田城跡	27	神前神社
B	青谷上寺地遺跡	13	露谷古墳群	28	鳴滝宮ノ前遺跡
C	河原下飯田所在遺跡	14	善田古墳群	29	鳴滝古墳群
D	大坪岸ノ上遺跡	15	奥崎古墳群	30	山田淡谷東平遺跡
1	長尾鼻古墳群	16	大坪古墳群	31	田原谷宮下遺跡
2	長尾鼻1号墳	17	大口古墳群	32	相模神社
3	青谷第1遺跡	18	大口第1遺跡	33	岩本遺跡
4	東山古墳	19	大口第2遺跡	34	青谷第4遺跡
5	阿古山古墳群	20	大口第3遺跡	35	吉川古墳群
6	阿古山22号墳	21	カヤマ遺跡	36	吉川43号墳
7	養郷古墳群	22	早牛古墳群	37	井手古墳群
8	藏内水船遺跡	23	利川神社	38	長和潮古墳群
9	藏内古墳群	24	山根上式田出土土地	39	長谷古墳群
10	藏内上長谷第2遺跡	25	山根上式田城跡	40	釜ノ口古墳群
11	藏内上長谷第4遺跡	26	龟尻古墳群	41	長和潮稲葉尾遺跡
				42	幡井神社

図1 青谷町内の主な遺跡分布図

その他の青谷町内の遺跡は次のとおりである。

旧石器時代の遺跡は、今のところ確認されていない。縄文時代の遺跡としては、砂丘地にある青谷高校の井戸掘り作業中に偶然発見された青谷第1遺跡（3）がある。ここでは、縄文時代中期から弥生時代、古墳時代にかけての土器片が出土している。このほか縄文時代の遺跡としては、前述の青谷上寺地遺跡、縄文時代前期土器片の散布が確認された蔵内上長谷第2遺跡（10）、1995年に試掘調査が実施され、縄文時代後期の土器片が出土した蔵内上長谷第4遺跡（11）、網見部落周辺の石皿や石斧が出土した長和瀬稻葉尾遺跡（41）ある。

弥生時代主な遺跡としては、前述の青谷上寺地遺跡、青谷第4遺跡、大口第1・第2遺跡のほかに蔵内水船遺跡（9）、田原谷宮下遺跡（31）がある。

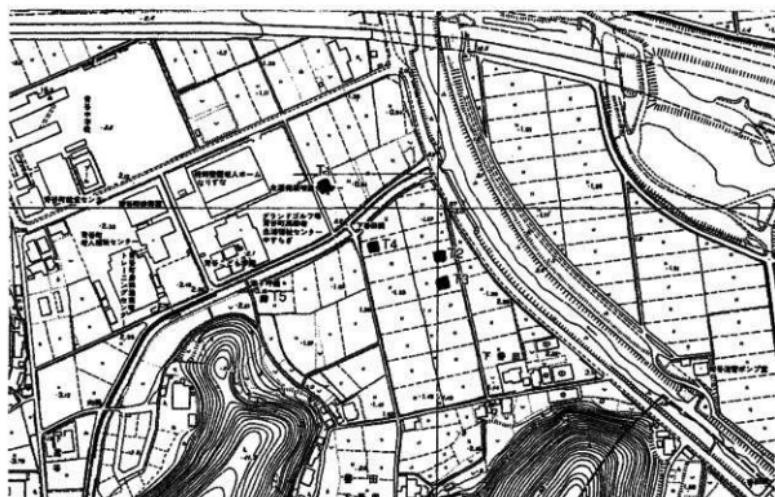
古墳時代には町の中央と東西の丘陵上に多数の古墳が造営されている。現在確認されている古墳や散布地は海岸から約6km以内の位置に分布し、ほとんどの古墳は直径10mから20m程度の円墳と考えられる。町内の主な古墳は東側の台地・丘陵には北側から町内最大の前方後円墳である長尾鼻1号墳（2）（全長34m）を有する長尾鼻古墳群（1）、町内第2の前方後円墳である東山古墳（4）（全長28m）、船や星などの線刻が施された県史跡指定されている阿古山22号墳（6）を有する阿古山古墳群（5）、養郷古墳群（7）、蔵内古墳群（9）と続く。中央部の丘陵には東側尾根北側から前述の善田古墳群があり、市史跡指定の奥崎古墳群（15）、大坪古墳群（16）、大口古墳群（17）、早牛古墳群（22）と連なっている。中央西側の丘陵には露谷古墳群、その西側に亀尻古墳群（26）、金環が出土した鳴滝古墳群（29）が連なっている。西側の丘陵には前述の吉川古墳群が所在し、その西側の丘陵には井手古墳群（35）、長和瀬古墳群（38）、長谷古墳群（39）、釜ノ口古墳群（40）と続いている。古墳時代の古墳以外の遺跡は縄文・弥生時代の項で述べたように、青谷第1遺跡、青谷上寺地遺跡、大口第1・第2・第3遺跡、カヤマ遺跡が主なものである。

奈良時代以降の遺跡には1997年に発掘調査が実施された山田淡谷東平遺跡（30）があり、中世の礎石建物跡、鍛冶炉跡に伴うと考えられる鉄滓等が確認されている。また1999年に発掘調査が実施された鳴滝宮ノ前遺跡（28）では中世の土師器や構造遺構を検出している。この他には前述の青谷上寺地遺跡、カヤマ遺跡が上げられる。

歴史上の資料としては、因幡国の官道に置かれた4カ所の駅のうち「柏尾駅」の有力な候補地といわれる相屋神社（32）周辺や、勝部・日置といった部民制度に由来するといわれる郷名が残っている。また時代はやや下るが町内の式内社である利川神社（23）と幡井神社（42）がそれぞれに早牛・網見に、式外社である相屋神社と神前神社（27）がそれぞれ青谷・鳴滝にあることは、遺跡との関わりが考えられる。

第3章 平成15年度調査

第1節 善田傍示ヶ崎遺跡



第1トレンチ

1. トレンチの概要

このトレンチは開発区域内北側に9.0m×9.0mの規模で設定し、掘り下げを行なった。このトレンチでは第1層から第6層までは近現代の水田跡と考えられる。第7層は有機質を大量に含む層である。この層は西から東にかけて薄くなっている。第8層も有機質を大量に含むが平坦な堆積をしている。第10層は粗砂層で西側に厚く堆積し、東にかけて徐々に薄くなっている。第11層は北側では暗灰黄色砂質シルト層が厚く堆積しているが、南側では第11層が薄くなり第11層に代わり粗砂を含む砂質シルト層が厚く堆積している。第10層と第11層は奈良時代の馬形、人形などの祭祀具を包含している。第12層は灰色粘土層で下部に貝を含んでいる。第13層は灰褐色粘土層で巻貝、牡蠣を含んでいる。このトレンチでは第9層から第12層上部及び下部の5点について植物珪酸体分析及び珪藻分析を実施し、砂層中の木片2点及び第12層中の木材1点について放射性炭素年代測定を実施した。詳細については第6章を参照していただきたい。

2. 遺構

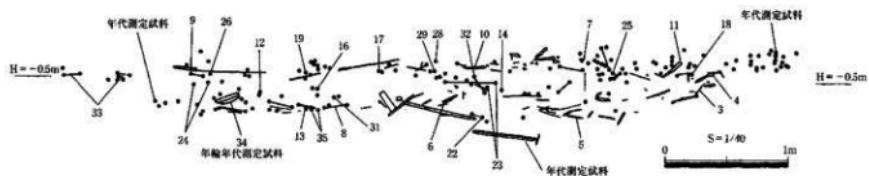
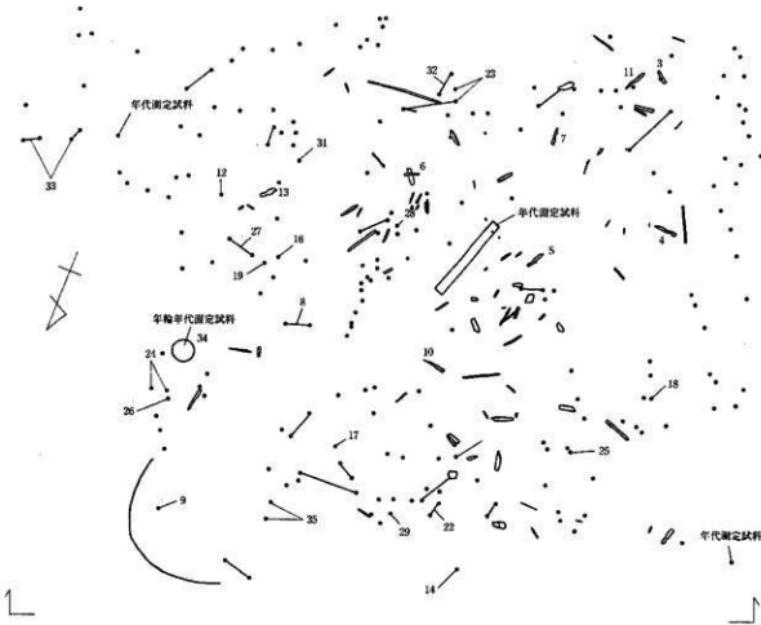
このトレンチでは第10層から第11層にかけて木器溜りを検出している。木器溜りは馬形、人形などの木製祭祀具を含み、トレンチ内南西側を中心にして北西側にかけて徐々に薄くなっている。またそれと同様に粗砂層も南西から北西にかけて薄くなっていることから、それぞれの砂層に伴い、少なくとも2時期の堆積を想定できるが、現場で明確に区分することはできなかった。土器は時期を判断できるものではなく、祭祀具などから判断すると奈良時代が想定できる。また奈良文化財研究所の光谷先生に曲物の底板で年輪年代測定を実施していただいた結果、632年の年代を得ることができた。しかしながら試料は心材型であるため正確な伐採年代を得ることはできなかった。詳細については第6章を参照していただきたい。

3. 遺物

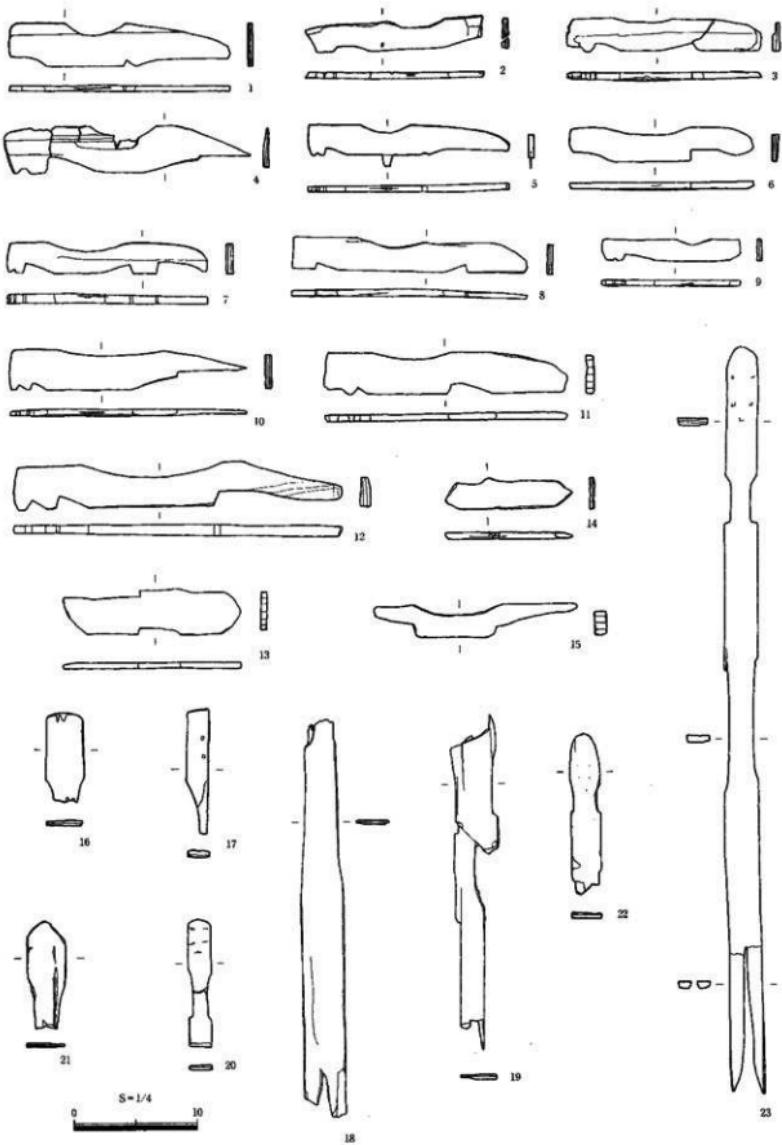
このトレンチでは木器溜りを検出している。土器は土師器片、須恵器片が少量出土しているが、器種のわかるものはなく、いずれも摩滅したものばかりである。木製品の1から14は馬形である。1から12は裸馬、13、14は飾馬である。馬形はいわゆる裸馬が中心をなし、飾馬は2点のみである。馬形は一枚板を切り欠いて作られており、木取りは板目が16点、柾目が2点である。足はないものあるいは1つでその他のものは見ることができない。15は鳥形と考えられる。16から23は人形である。16は頭部で顔の表現は見られない。17は頭部で半分のみが残っている。2箇所にくぼみがあり、顔の表現と考えられる。18、19は胴部である。18はわずかに足の部分が残っており、19は胴部で切り込みを入れて手の部分を表現している。20～22は頭部である。20と22は頭部から胴部にかけて遺存しており、20は鋭利なもので点状に彫り込みを施す。22は線状の切り込みを入れて顔を表現している。23は完形品で、全長61.1cmで、頭部10.5cm、脚部12.0cmを測る。顔はわずかに彫りこんで表現しており、墨画は見られない。手はわずかに切り込みを入れて表現している。24から31は斎車である。24から26、30、32は上端部、27から29、31は先端部である。斎車の完形品はなく、先端部分あるいは上端部のみである。33は不明木製品である。34、35は曲物である。いずれも蓋で4カ所を棒皮縫じで結合する。34は径17.5cmだが、底板の1/4程度破損している。2cm程度の側面が遺存する。材はヒノキである。35は径18.8cmである。

トレンチ番号	トレンチの規模(m)	遺構	遺物
T 1	9.0×9.0	木器溜り	木製品・土師器・須恵器
T 2	9.0×9.0		木製品・土師器
T 3	9.0×9.0		土師器
T 4	9.0×9.0		木製品
T 5	6.0×6.0	木器溜り	木製品・土師器・須恵器

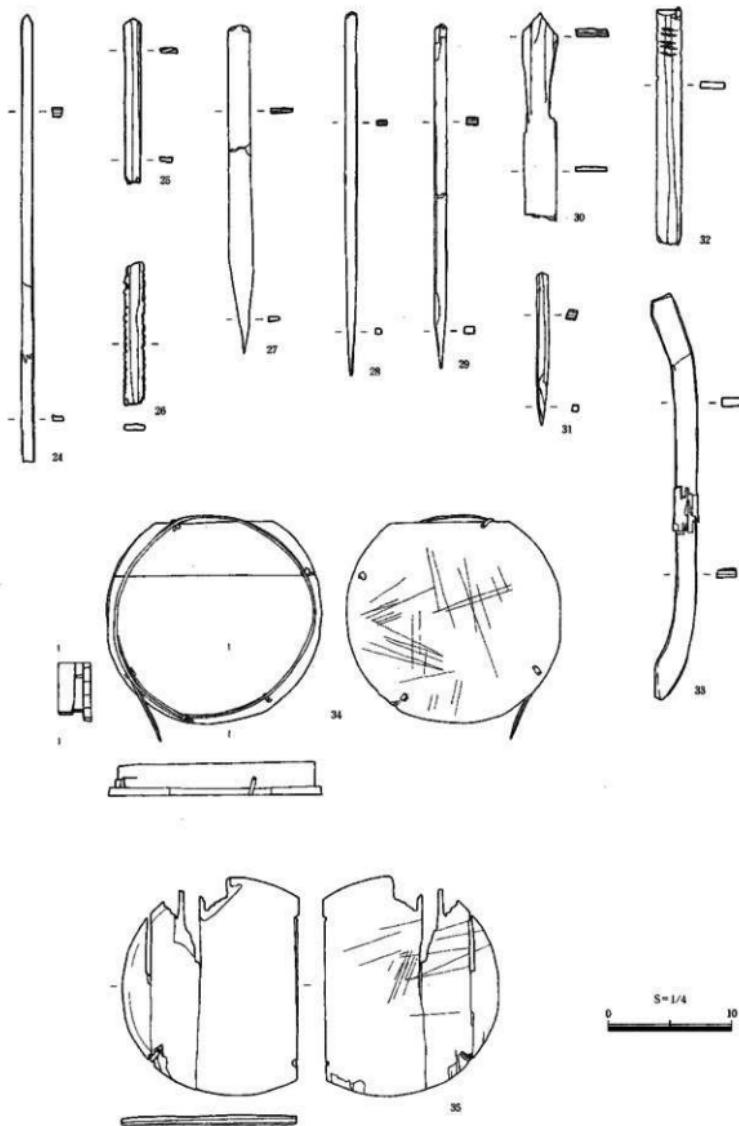
表1 善田傍示ヶ崎遺跡トレンチ一覧表



挿図4 善田傍示ヶ崎遺跡第1トレンチ遺物出土状況



挿図5 善田傍ヶ崎遺跡第1トレンチ出土遺物（1）



挿図6 善田傍示ヶ崎遺跡第1トレンチ出土遺物（2）

第4章 平成16年度調査

第1節 善田傍示ヶ崎遺跡

第2トレンチ

1. トレンチの概要

昨年度も同遺跡の調査を実施しているため、トレンチ番号は昨年度からの番号を継続して使用する。このトレンチは開発区域内北東側に9.0m×9.0mの規模で設定し、掘り下げを行なった。このトレンチでは第1層から第6層までは耕作土と考えられ、攪拌に伴う粗砂を含むシルト層である。第7層は日置川の氾濫によって形成された粗砂層で磨耗した土師器片を含んでいるが、いずれも小片のため時期の特定できるものはなかった。第8層から第12層は植物質を含むシルト層で低湿な環境にあったことが想定される。第11層からは鎌倉期の土師器片が出土している。第12層からは奈良期の木製祭具が出土している。第13層から第16層は粘土層が厚く堆積している。このトレンチでは第10層から第13層の4点について植物珪酸体分析及び珪藻分析を実施している。

2. 遺構

このトレンチでは検出することはできなかった。

3. 遺物

このトレンチでは木製品5点、土師器1点が出土している。土師器は鎌倉期のものが1点出土している。木製品は田下駄1点、馬形1点、斎串2点、不明木製品1点である。1は田下駄で板状のものに3ヶ所に径1cmの穿孔が施されている。2は馬形で、いわゆる裸馬である。木取りは板目で、足は1つである。3は斎串の先端部である。

第3トレンチ

1. トレンチの概要

このトレンチは開発区域内南東側に9.0m×9.0mの規模で設定し、掘り下げを行なった。このトレンチでは第1層から第12層までは耕作土と考えられ、攪拌に伴う粗砂を含むシルト層である。第14層は日置

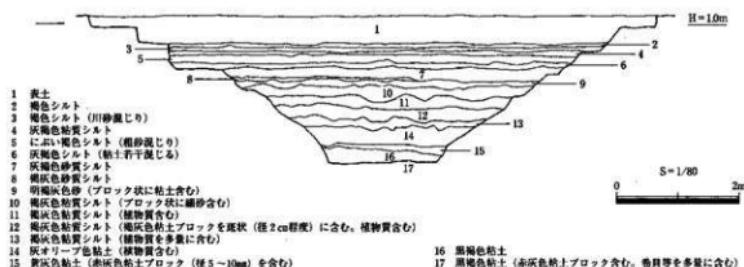
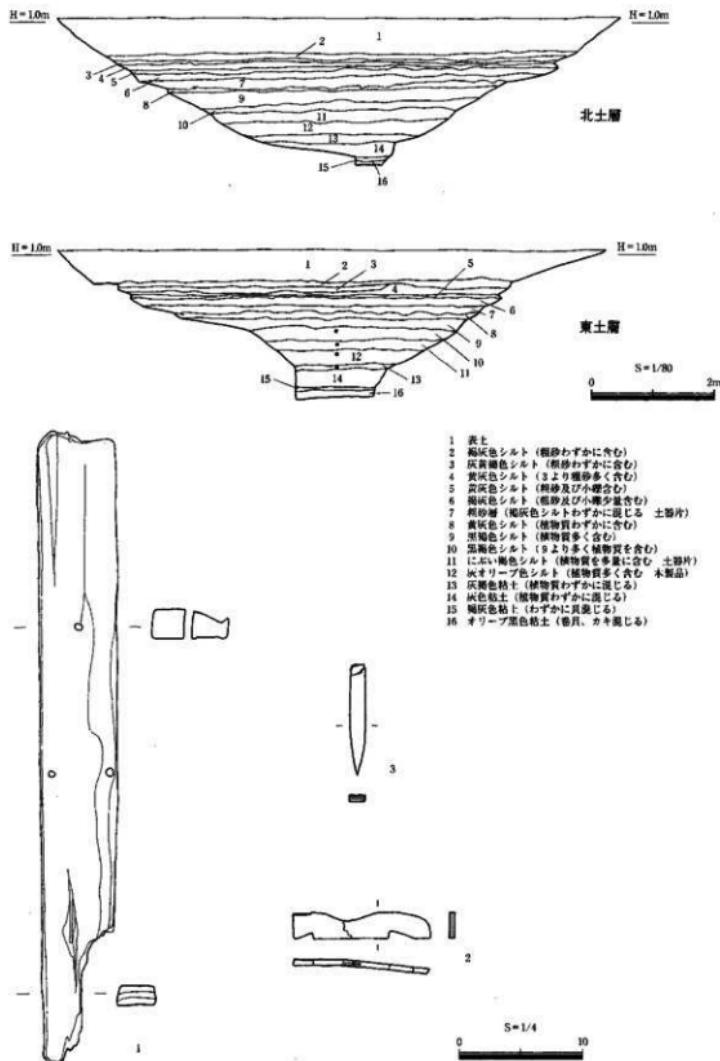


図7 善田傍示ヶ崎遺跡第3トレンチ東土層図



插図8 善田傍示ヶ崎遺跡第2トレンチ土層図及び出土遺物

川の氾濫によって形成された粗砂層で磨耗した土器部片、須恵器片を含んでいたが、いずれも小片のため時期の特定できるものはなかった。第15層から第19層までは植物質を含むシルト層で低湿な環境にあったことが想定される。第18層中より須恵器片、加工木が出土している。第20層からは粘土層が厚く

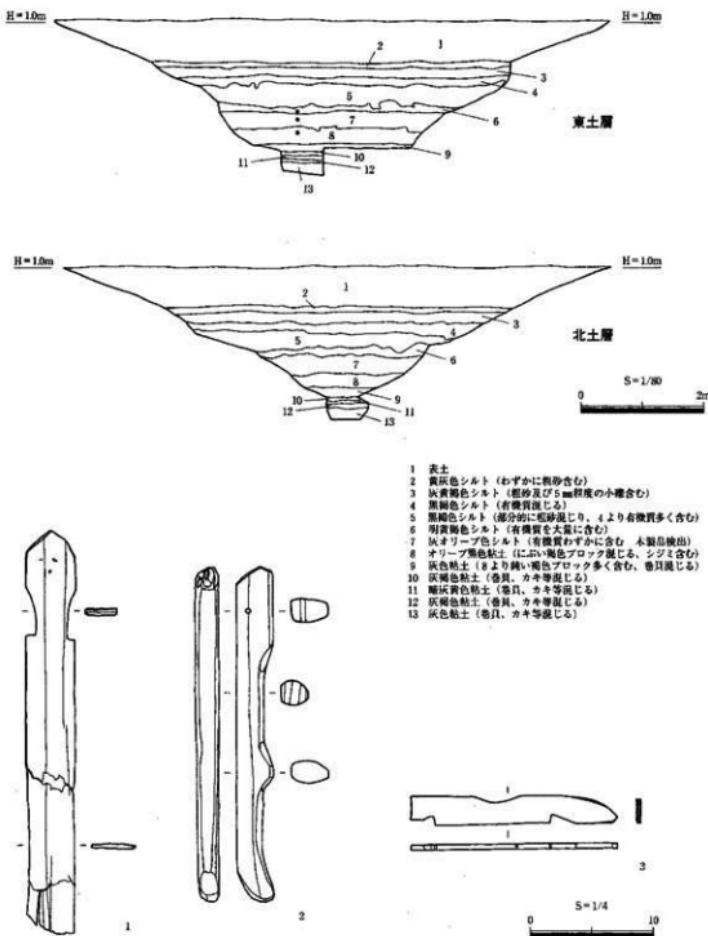
堆積しており、第22層では巻貝を含む海生層を確認している。

2. 遺構

このトレンチでは明確な遺構を確認することはできなかった。

3. 遺物

このトレンチでは土師器片、須恵器片が出土しているが、いずれも小片のため実測することはできなかった。



挿図9 善田傍示ヶ崎遺跡第4トレンチ出土遺物及び土層図

第4 トレンチ

1. トレンチの概要

このトレンチは開発区域北側に9.0m×9.0mの規模で設定し、掘り下げを行なった。このトレンチでは第1層から第3層までは耕作土と考えられ、攪拌に伴う粗砂を含むシルト層である。第4層から第7層は植物質を含むシルト層で、低湿な環境にあったことが想定される。第7層からは奈良期の木製祭祀具が出土している。第8層以下は粘土層が厚く堆積している。このトレンチでは第6層から第8層の3点で植物珪酸体分析及び珪藻分析を実施している。詳細については第6章を参照していただきたい。

2. 遺構

このトレンチでは検出することはできなかった。

3. 遺物

このトレンチでは土器片1点、木製品3点が出土している。土器片は第5層中より備前系すり鉢が出士しているが、小片のため図化はできなかった。木製品は人形1点、馬形1点、不明木製品1点である。1は人形で手足を欠損しており、上半身のみである。目と口をわずかに彫りこんで表現するものである。2は馬形でいわゆる裸馬である。木取りは板目で、足は1つであるⁱⁱⁱ。不明木製品は機織に関連するものと考えられる。

第5 トレンチ

1. トレンチの概要

このトレンチは開発区域内西側に6.0m×6.0mの規模で設定し、掘り下げを行なった。このトレンチでは、表土下第2層中から木片及び土師器片、須恵器片を検出し始め、第8層から奈良期の木製祭祀具や須恵器片がトレンチ内全面に広がりをみせ、第10層から第11層にかけて多量に堆積している。表土下より大きな礫を検出し始め、大きいものでは長さ1.5m以上のものもあり第11層以下まで続く。この大きな礫は表面が風化しており、奈良期以前の土石流によって堆積したものと推定される^{iv}。このトレンチでは第8層から第11層まで植物珪酸体分析及び珪藻分析を行なった結果、第10・11層は干潟に隣接する湿地帯であったと想定される。詳細については第6章を参照していただきたい。

2. 遺構

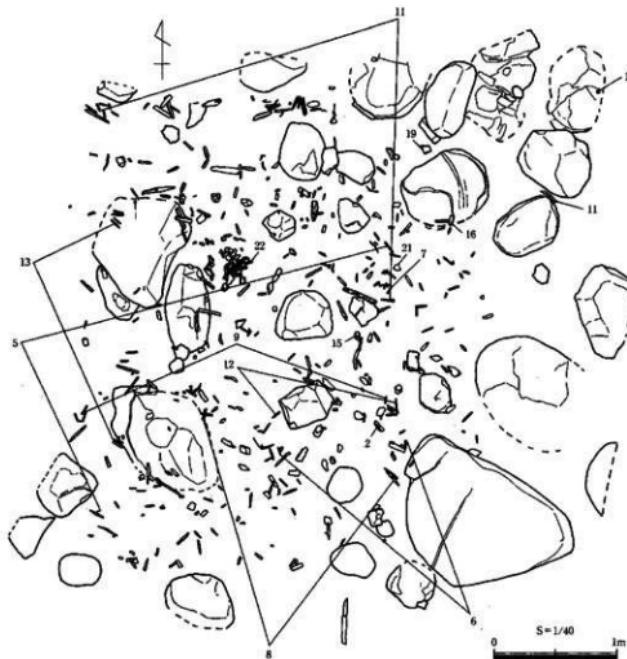
このトレンチでは木器溜りを検出している。この木器溜りは斎串や木片を含み、大きな礫の脇に斎串片が重なった状態で出土している。重なった状態で出土しているものの接合するものはなかった。またトレンチ内の遺物で接合するものが14点あり、大きく位置を損なっているとは考えにくく、周辺に祭祀を行う空間があったと推定される。

3. 遺物

このトレンチでは土器片や木製品が大量に出土している。木製品は斎串39点、馬形8点、糸巻き1点、用途不明品1点である。1は糸巻きである。ほぼ中央部に径0.5cmの穴が開いている。2から4は馬形である。いずれも裸馬でほぼ中央部分から半分に破損している。2は背部を両側からカットするのみで、これまで確認してきた馬形に比べ、抽象的なつくりとなっている。足の本数については不明である。5から14は斎串である。15、16は用途不明品である。15は断面台形状を呈す。作りは粗く、なにかの製作途上の可能性もある。16は長軸7.2cm短軸4.0cm長方形の角材に腰穴をあけ、断面菱形状に加工した柄を装着する。机の脚部あるいは木柵と考えられる。端部は二次加工が行われ、全体については不

明である。19は高坏で锐利なもので2方向から透かしを入れている。20は須惠器坏蓋で内側にかえりが付く。21は須惠器壺の胴部片である。外面は平行タタキ、内面は同心円文である。22は土師器壺でトレンチの中央部分で潰れるような形で出土している。

註1) 鳥取大学名誉教授赤木三郎氏のご教示をいただいた。

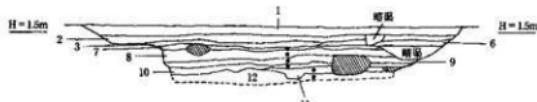


挿図10 善田傍示ヶ崎遺跡第5トレンチ遺物出土状況

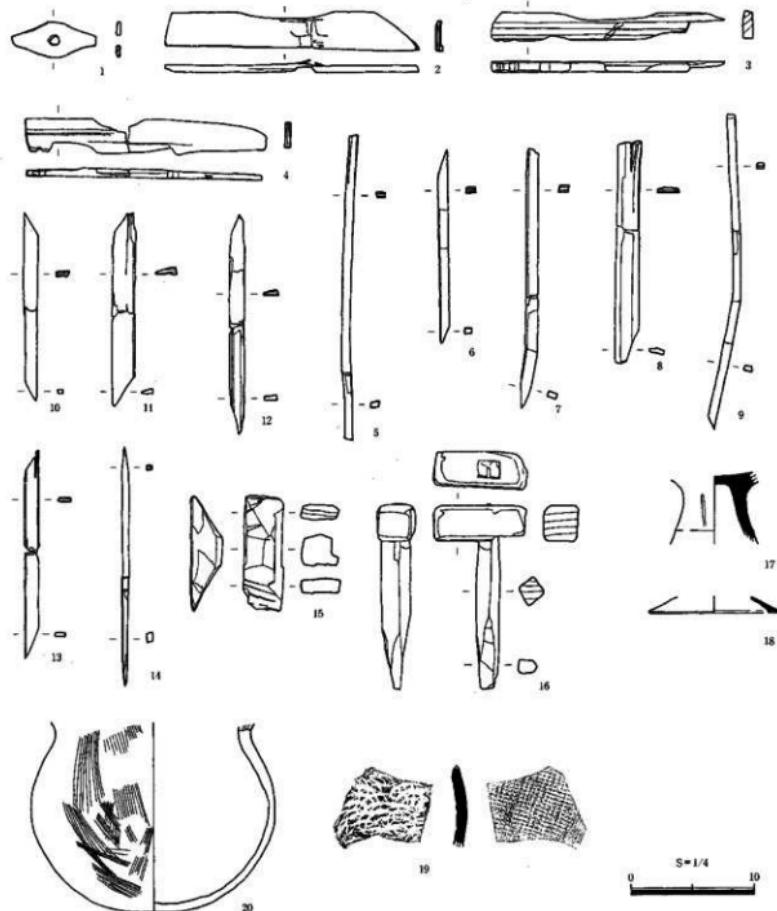
第2節 出土遺物について

善田傍示ヶ崎遺跡は律令祭祀具が多数出土している。祭祀具は簀串、馬形、人形を中心をなし、簀串86点、馬形28点、人形15点が出土している。

簀串の形状は大きく分けると薄板状のものと細長い角材状のものに大別でき、いずれも非常に粗雑な



- サンプル採取位置
- 1 黄土
 - 2 褐赤褐色シルト (小標設じり)
 - 3 褐赤褐色シルト (植物質含む)
 - 4 灰褐色シルト (埋没じり)
 - 5 にぶい青褐色シルト
 - 6 褐灰色粘質シルト
 - 7 灰褐色シルト
 - 8 灰褐色粘質シルト
 - 9 褐褐色シルト (中標設じり)
 - 10 黑褐色粘質シルト (植物質含む)
 - 11 黑褐色シルト (植物質含む)
 - 12 暗オリーブ褐色細層



挿図11 善田傍示ヶ崎遺跡第5トレンチ出土遺物及び土層図

つくりである。薄板状の上端部は圭頭状、斜めに切るもの、水平につくるもの、小さな抉りを複数回入れるものがある。角材状のものは薄板状のものと同様に圭頭状、斜めに切るもの、水平につくるものがあるが、小さな抉りを複数回入れるものは見られない。薄板状のものと角材状のものは混在しており、時期差を見ることはできない。出土状況を見るといずれも完形品ではなく、上端部あるいは先端部に分かれて出土している。接合関係を見ると第1トレンチでは5点が接合し、第5トレンチでは14点が接合している。第5トレンチでは巨石の周辺で斎串が重なった状態で出土しているが、それぞれに接合関係はない、意識的におかれたものとは考えにくく、上流からの漂着と考えられる。斎串が二つあるいは三つに分かれた状態で出土していることから、二つあるいは複数回に折って祭祀を行った可能性が考えられる。しかし、出土例が少ないとから断定することはできない。

馬形には背部の抉りに小さな切り欠きを加えて鞍を表現した飾馬と鞍を持たない裸馬がある。馬形は28点中2点が飾馬でそれ以外は裸馬である。また完形品は14点出土しており、すべて裸馬である。木取りは柵目板が1点のみでその他は板目板である。ほとんどの馬形は腹部に切り込みを入れて装着する1本足であり、中には足が遺存しているものもある。裸馬と飾馬は出現に時期差が考えられているが、ここでは明確にすることはできなかった。

人形は15点出土しているが、いずれも正面全身人形と考えられる。全身がわかるものは1点のみで、その他は頭部あるいは胸部のみである。顔は目、口、眉をわずかに彫り込んで表現し、墨で顔を描いたものは確認できなかった。

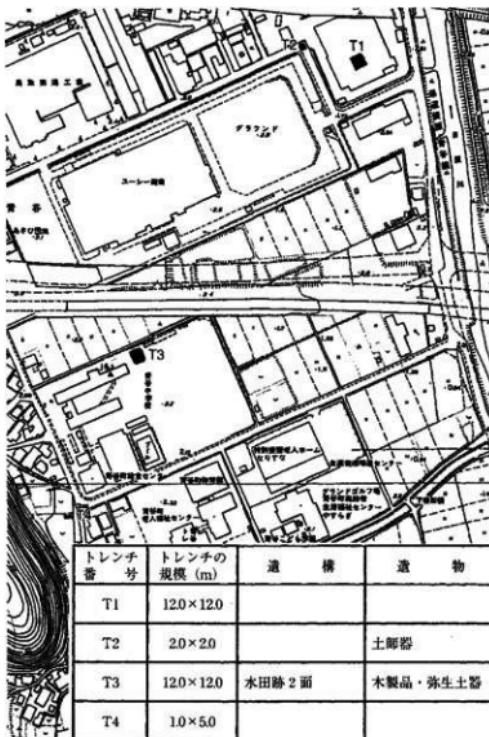
第3節 青谷上寺地遺跡

第1トレンチ

1. トレンチの概要

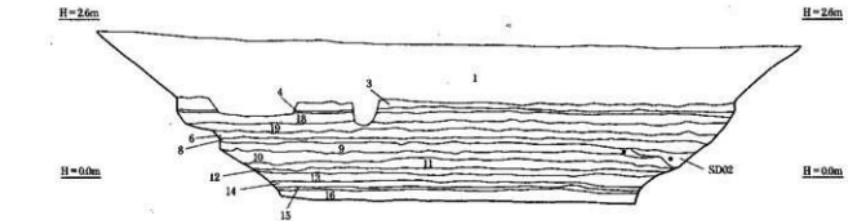
開発区域は明治期の図面を見ると水田が広がっており、すぐそばを日置川が流れている。昭和39年には青谷駅から近いこともあり、水田を造成し共同選果場が建設され、梨等の選果が行われていた。しかし平成7年度に日置谷地区に新たに選果場を新設したことにより平成7年に操業を停止している。その後、平成15年度に更地となり現在に至っている。

このトレンチは開発区域内の建物建設予定地において12m×12mの規模で設定し、掘り下げを行なった。表土から約2.5m掘り下げたところで、地盤改良と考えられるコンクリート面に当たり、さらに掘り下げた所、礫及び砂による地盤改良がなされていた。表土から約3.5m程度

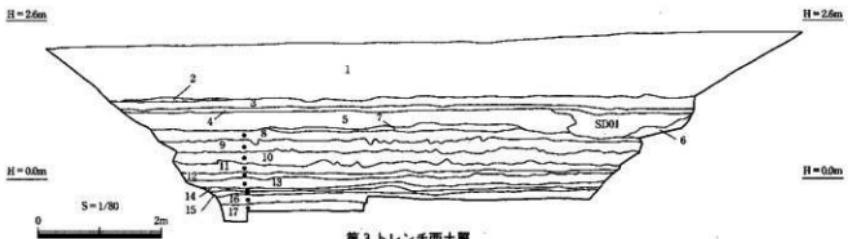


挿図12 青谷上寺地遺跡トレンチ配置図

第2トレンチ南土層



第3トレンチ北土層



第3トレンチ西土層

- 1 造成土及び田表土
- 2 灰黄褐色砂質シルト
- 3 黄褐色シルト（わずかに根稍混じる）
- 4 明瞭な砂質シルト（わずかに根稍混じる）
- 5 灰褐色シルト（根稍多く含む）
- 6 黑褐色シルト（根稍多く含む、黄化物木片点在、灰白色ブロック点在）
- 7 黑褐色シルト（根稍多く含む、にじみ赤褐色ブロックわずかに含む）
- 8 黑褐色シルト（根稍多く含む、灰化物点在、木片少量混じる）
- 9 にじみ黄褐色シルト（灰褐色ブロック点在）
- 10 黃灰色シルト（木片わずかに混じる）
- 11 灰黒褐色シルト（灰褐色ブロック点在、加工木出土）
- 12 灰黒褐色シルト（木片わずかに含む）
- 13 黑褐色シルト（灰褐色ブロック点在）
- 14 灰黒褐色シルト（土路底土、木片少量、植物質少量混じる）
- 15 黑褐色シルト（木片わずかに含む）
- 16 黑褐色粘土（木片少く含む、木片量をなす）
- 17 黑褐色粘土及び植物質が交互に堆積する。
- 18 灰褐色シルト（根稍わずかに含む）
- 19 にじみ黄褐色シルト（根稍わずかに含む）
- 20 ●サンブル採取位置

- 1 造成土
- 2 灰灰黒褐色シルト（田表土）
- 3 黄褐色シルト（②より細い）
- 4 灰黒褐色シルト（③より細い）
- 5 白褐色シルト
- 6 灰灰褐色シルト（④より細い）陶器片
- 7 黄褐色シルト（灰白色ブロック含む）陶器片
- 8 灰灰褐色シルト（有機質わずかに含む、灰混じる）
- 9 黑褐色シルト（有機質わずかに含む、⑦より多い）
- 10 黑褐色シルト（有機質わずかに含む、土路片）
- 11 灰灰褐色シルト（有機質微量に含む）
- 12 灰オリーブ色シルト（有機質大量に含む）
- 13 灰灰褐色砂質シルト（有機質大量に含む）

S = 1/40 1m



S = 1/4 10

挿図13 青谷上寺地遺跡第2、第3トレンチ土層図及び第2トレンチ出土遺物

まで掘り下げを行なったが、壁面の崩壊が著しく、掘り下げを中止した。造成土以下を確認するに至らなかったが、周辺の調査と比較すると、造成時に遺構あるいは包含層を掘削していると考えられる。

第2トレント

1. トレントの概要

このトレントは下水道管工事に伴い、マンホール部分について2.0m×2.0mの規模で試掘調査を実施した。表土から約1.8mは造成が行われている。造成土は重機により除去し、その後人力によって掘り下げを行なった。第1層から第3層までは旧水田と考えられる。また造成土内に巨礫が混じっていたため、第1層、第2層については重機によって掘削を行なった部分もある。第5層は近世の陶器片を含む水田層と考えられる。第6層は灰白色ブロックを含むシルト層である。この層からは近世の陶器片が出土している。第7層は有機質をわずかに含むシルト層で、木片や炭をわずかに含む。第8層は有機質をわずかに含むシルト層で、遺物は出土していない。第9層は有機質を多く含むシルト層であり、中世と考えられ土器片が出土している。第10層から第12層は有機質を大量に含む砂質シルト層である。平成14年度に隣接地で行われた鳥取県埋蔵文化財センターの発掘調査³³⁾と比較すると第5層から第9層までは水田層の可能性が考えられ、また第10層から第12層は潟湖の最上部の堆積と考えられる³⁴⁾。

2. 遺構

このトレントでは遺構を検出することはできなかった。

3. 遺物

このトレントでは土師器片が2点出土している。1、2は土師器皿である。底部に回転糸切り痕を残し、時期は中世ごろと考えられる。

第3トレント

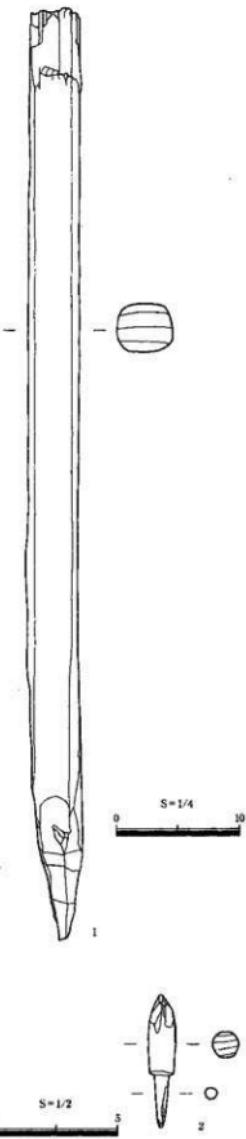
1. トレントの概要

このトレントは青谷中学校改築計画に伴い、グラウンド北西隅に12.0m×12.0mの規模で設定し、掘り下げを行なった。表土から約90cmは造成土及び旧表土であったため、重機によって除去し、その後人力によって掘り下げを行なった。第2層～第7層まではシルト層が厚く堆積しており、近現代の水田と考えられる。また第8層は粗砂や木片を多く含むシルト層で水田耕作が行われ、粗砂が攪拌されたと考えられる。第9・10層はシルト層で木片を多く含む層である。第11～13層はシルト層で木片をわずかに含む層である。第14・15層は珪藻を含む水田層である。第16層以下は植物層と粘土層が互生状に堆積する自然堆積層である。このトレントでは西側第8層から第17層の10点、北側で検出したSD02の埋土1点、計11点の植物珪酸体分析及び珪藻分析を実施した。またSD02が掘り込まれた第9層の土中炭化物、第14層中より検出した杭、及び第14層中より出土した木片、第15層の土中炭化物で放射性炭素年代測定を実施している。詳細については第6章を参照していただきたい。

2. 遺構

SD02

SD02はトレントの北西隅で検出したもので、第9層から掘り込まれ北西から南西方向に延びるものと考えられる。溝の深さは24cmで、幅は不明である。トレントの隅で検出したため全体については不明である。分析の結果、高密度の縦の植物珪酸体を含み、流水と止水の珪藻を含む不安定な流れが想定されることから水田の水路と考えられる。



挿図14 青谷上寺地遺跡第3トレンチ出土遺物

水田

第13層黒褐色シルト層を掘り下げるに第14層灰黄褐色シルトをベースとする畦畔状の高まりを検出し、水田面と判断した。検出した畦畔は南西から北東方向に延び、高さ4cm前後で幅約50cm、長さ360cmである。時期は弥生時代後期と考えられるが、第14層からは胴部片が2点出土しているのみで、明確に判断するには至らなかつた。

第14層灰黄褐色シルト層を掘り下げるに第15層暗灰黄色シルトをベースとする畦畔状の高まりを検出し、水田と判断した。検出した畦畔は南西から北東方向に延び、高さ3cm前後で幅約50cm、長さ370cmである。時期は遺物を伴わなかつたため、放射性炭素年代測定を実施した結果、弥生時代中期末ごろの年代を得ている。第14層で検出した畦畔とはほぼ同じような位置で、同じ方向に延びている。またこれまでに検出した畦畔と同様の方向を示しており、青谷上寺地遺跡全体で方角を意識していると考えられる。またいづれの層からも1200個/gと、低密度であるがプラントオバールを検出している。このことから長期間にわたって水田が営まれていたのではなく、ごく短い期間しか水田として利用されていなかつたと考えられる。

3. 遺物

このトレンチでは加工痕の残る木片がわずかに出土し、形状のわかるものは2点しかなかつた。また弥生土器細片2点が出土しているが、図化できなかつた。1は第10層中より出土した木軸である。丁寧に加工し、先端部を作っている。2は杭で、材は杉である。どこから打ち込まれたかは不明である。また1点しか確認していないため性格についても不明である。

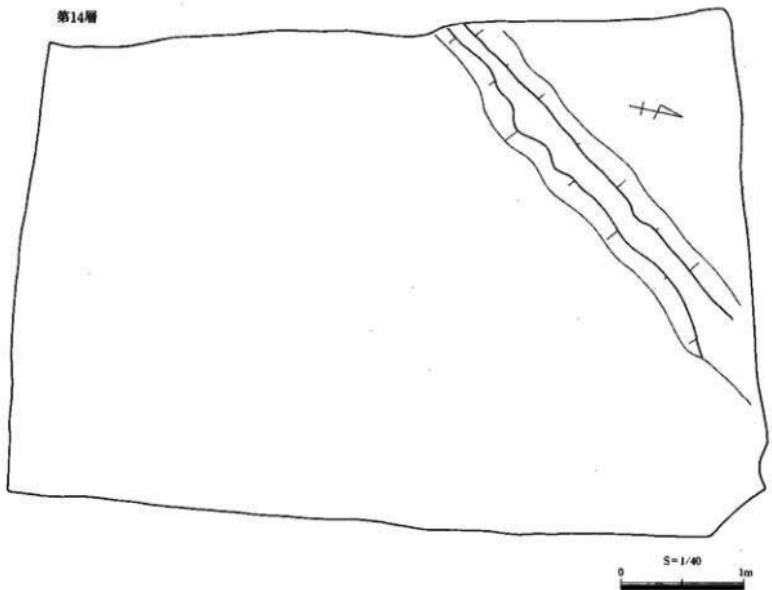
第4トレンチ

1. トレンチの概要

このトレンチは個人住宅建設設計画に伴い、敷地内に1.0m×5.0mの規模で設定し、掘り下げを行つた。現在は畠となつてゐるが、以前は水田が営まれていた。このトレンチでは遺構、遺物を検出することはできなかつた。またハンドオーガーを使用してさらに下層を確認したところ、地表下約2.8mで貝を含む層を検出している。

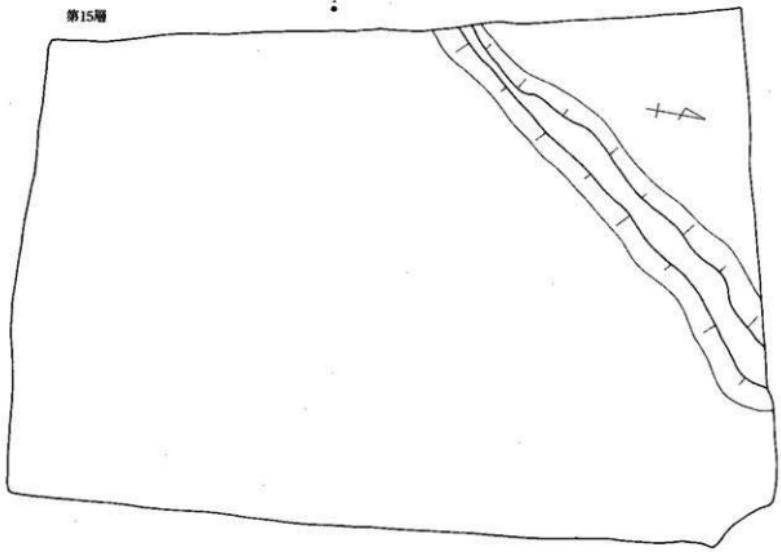
註2)『青谷上寺地遺跡5』鳥取県埋蔵文化財センター 2002年

第14層



S = 1/40
0 1m

第15層



S = 1/40
0 1m

挿図15 青谷上寺地遺跡第3トレンチ畦畔検出状況

第4節 河原下飯田所在遺跡

この試掘調査は、河原因州組合製紙業排水処理施設建設設計画に伴って、計画区域内において実施した。

この調査区域の北西側丘陵山裾部には、土師器・須恵器等の散布が確認されている河原下飯田所在遺跡が存在する。このため遺跡の存在を確認するためトレンチによって調査した。

1. トレンチの概要

このトレンチは、工事予定区域内において、 $2.0m \times 5.0m$ の規模でトレンチを設定し、掘り下げた。現地盤から約110cm掘り下げたが、疊層、川砂を多量に含む疊層、粘質土層が重なり、河川氾濫域または旧河道であったと考えられる。調査の結果、遺物、遺構とも検出することはできなかった。

第5節 大坪岸ノ上遺跡

大坪岸ノ上遺跡は日置谷地区の大坪集落東側に位置し、古墳時代の土師器等を表探すことができる。また今回の調査では現地踏査により自然堤防状の高まりを確認している。

第1トレンチ

1. トレンチの概要

このトレンチは開発区域内北西側に $2.0m \times 5.0m$ の規模で設定し、掘り下げを行った。第1層から第4層までは近現代の水田及び以前のは場整備時の造成土である。第5・6層はわずかに粗砂の混じるシルト層が厚く堆積している。第7層は上層より粗砂が多く含み、木片がわずかに出土し、第8・9層は粗砂をわずかに含むシルト層が堆積している。第10・11層はSD01の埋土である。第13層は西に向かって薄くなり、トレンチ中央付近で消える。第14層は第8層と第7層の間にわずかに堆積した砂質シルト層である。第12・15層はSD02の埋土である。このトレンチでは第7・8・9・12層の4点にて植物珪酸体分析及び珪藻分析を実施している。いずれの層からも稲の植物珪酸体を検出しており、稻作が行われた可能性が高い。またSD02の埋土から稲の植物珪酸体が検出されたことはSD02が水田の水路として使用された可能性が考えられる。またSD02中より出土した木材を奈良文化財研究所の光谷先生に年代測定していただき、西暦87年という年代を得ることができた。この材は辺材が残っており、伐採年代は

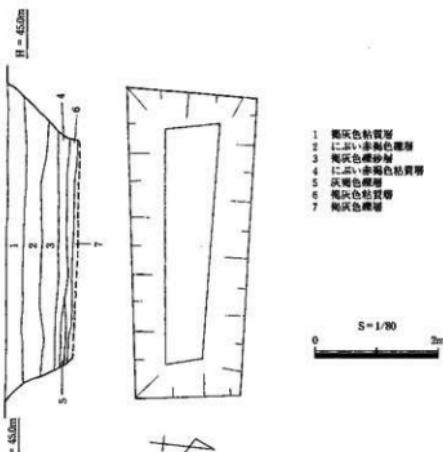
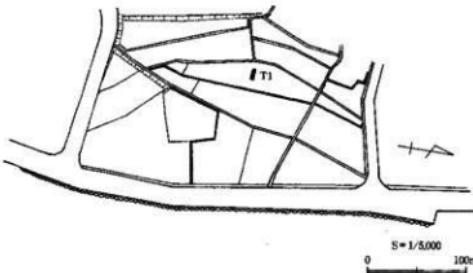


図16 河原下飯田所在遺跡トレンチ配置図及び平面図

おおよそ西暦100年ごろと推定される。植物珪酸体分析及び珪藻分析については次年度に報告する。

2. 遺構

SD01

当初は木片等が散在した状況だったが、断面を観察すると第7層を掘り込み南北方向に延びる溝を検出した。トレンチの東端で検出したため、規模等については不明である。時期についてはSD02より先行するため弥生時代後期以降と推定される。

SD02

SD02はSD01に先行する溝で、南北方向に延び、第8層を掘り込み作られている。トレンチの東端で検出したため、規模等については不明である。溝の掘方と考えられるところには幅約13cmの矢板が打ち込まれていた。また時期についてはSD02中に断面三角形の木製品が含まれており、光谷先生に年代測定を実施していただいたところ、西暦87年という年代を得ることができた。

3. 遺物

土師器、須恵器の細片とSD01に伴い加工痕のある木片が4点出土している。図化できたものは木製品1点である。1は田下駄である。4カ所に抉りを施す。材は杉と考えられる。

第4トレンチ

1. トレンチの概要

このトレンチは開発区域内中央西側に3.0m×6.0mの規模で設定し、掘り下げを行った。第1層から第3層は近現代の水田あるいは造成と考えられる。第4層は炭化物を少量含む褐灰色シルト層で、上部には小礫がありその中あるいは下部から土師器片が出土している。第5層は褐灰色砂質シルト層で、土師器、須恵器が出土している。第6層は細砂を含むシルト層である。第7・8層は中砂が堆積している。第9層から第15層は遺構内の埋土である。

2. 遺構

ピット群

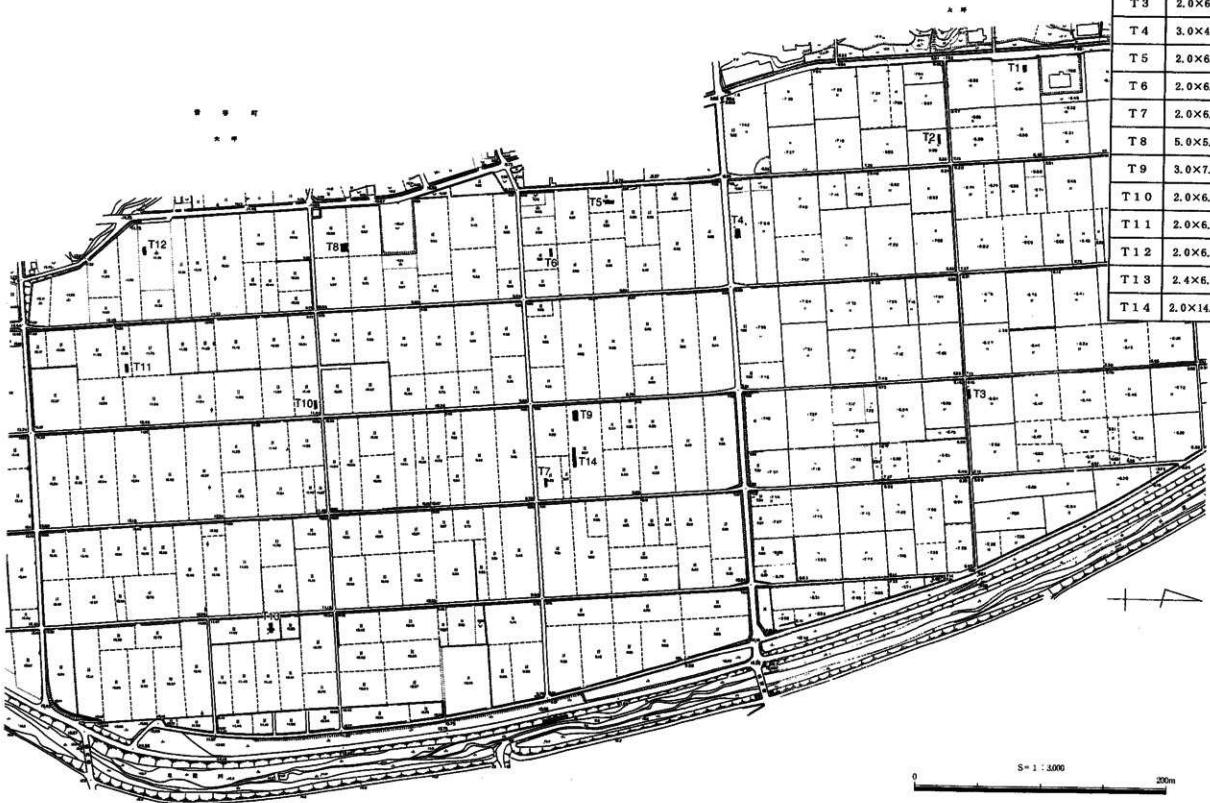
平面でピットを7基検出し、土層断面中より6基検出した。P1からP7は第4層から掘り込まれていると考えられる。試掘調査のためピットの完掘は行わず、半裁あるいはサブトレンチによって規模等を確認するにとどめた。調査面積が狭小のため、ピットに明確な規則性を見いだすことはできなかった。P1の平面はほぼ円形を呈し、径24cm、深さ10cmを測る。P2の平面は不整形な梢円形を呈し、径72cmを測る。P3及びP4は切り合っており、P4をP3が先行する。P3の平面はほぼ円形を呈し、径40cm、深さ11cmを測る。P4の平面はほぼ円形を呈すと考えられ、径35cmである。P5の平面は梢円形を呈すと考えられ、径20cm、深さ4cmを測る。P6の平面はほぼ円形を呈し、径30cmを測る。P7の平面はほぼ円形を呈し、径20cm、深さ8cmを測る。

土坑1

トレンチ北西隅で検出した。調査区外に広がっているため全体については不明だが、不整形な円形を呈すと考えられる。深さは15cmを測る。

3. 遺物

土師器、須恵器が出土している。1から5は土師器Ⅲである。いずれも底部に回転糸切痕を残す。時期は13世紀中ごろと考えられる。6は高台付壺である底径は6.0cmで0.5cmの高台が施されている。7は



トレンチ番号	トレンチの規模(m)	造構	造物
T 1	2.0×6.0	薄状遺構2	木製品・土師器
T 2	2.0×6.0		須恵器
T 3	2.0×6.0		須恵器
T 4	3.0×4.0	ピット13 土坑1	土師器・須恵器・水晶
T 5	2.0×6.0		土師器
T 6	2.0×6.0		
T 7	2.0×6.0		
T 8	5.0×5.0		土師器
T 9	3.0×7.0	薄状遺構2 ピット4	赤生土器・柱椎・杭
T 10	2.0×6.0		土師器
T 11	2.0×6.0		
T 12	2.0×6.0		
T 13	2.4×6.0	坑列1	土師器・須恵器・赤生土器
T 14	2.0×14.0		土師器・須恵器・赤生土器

挿図17 大坪岸ノ上遺跡トレンチ配置図

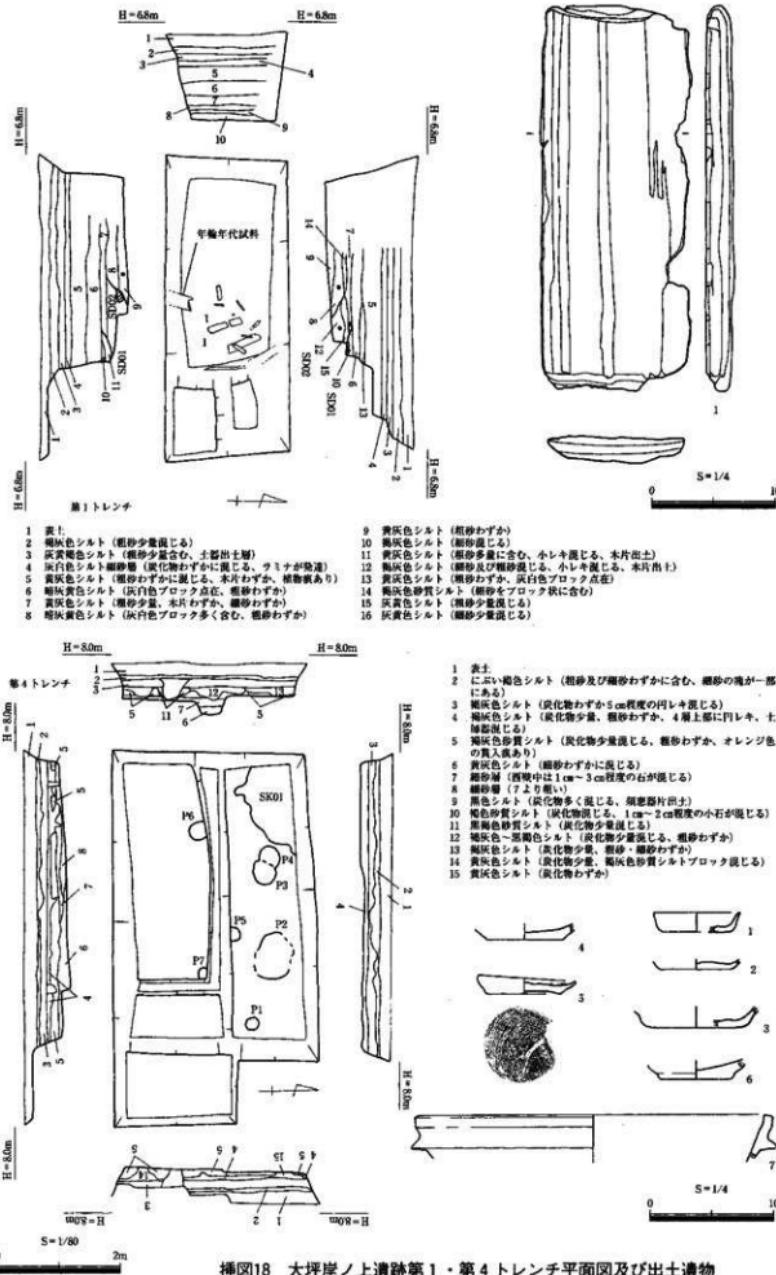


図18 大坪岸ノ上遺跡第1・第4トレンチ平面図及び出土遺物

瓦質上器羽釜である。口径は29.2cmを測り、やや外反気味に立ち上がる。断面三角形状の鉢を貼り付け後ナデを施す。

第9トレンチ

1. トレンチの概要

このトレンチは開発区域内中央部に2.0m×6.0mの規模で設定し、掘り下げを行ったが土壤が弱く、壁面が崩壊したため、急速南側へ1.0m、東側へ1.0m拡幅を行った。第1層から第5層までは近現代の水田あるいは造成と考えられる。第6層、第7層は褐灰色シルトで、弥生土器を検出している。第9層は炭化物を含む黄灰色砂質シルト層である。第9層以下は遺構の埋土と考えられ、褐色から黒褐色を呈し、炭化物を多く含む層である。今回の調査では遺構の完掘は行わず、土層を確認するだけにとどめた。また第6・7・8・14・17層の5点において植物珪酸体分析及び珪藻分析を行っている。第17層は稻の植物珪酸体を多く含み、稻作が行われた可能性が考えられる。詳細については次年度報告する。

2. 遺構

SD01

SD01は第11層を掘り込み北西から南西に延びるものである。幅は約270cm、深さ約40cmを測る。また溝の掘方の部分には杭が打ち込まれているが、杭の遺存状態は悪く、約10cm程度しか残っていなかった。また横木等は確認できなかった。溝の中から出土した遺物から弥生時代中期中葉と考えられる。

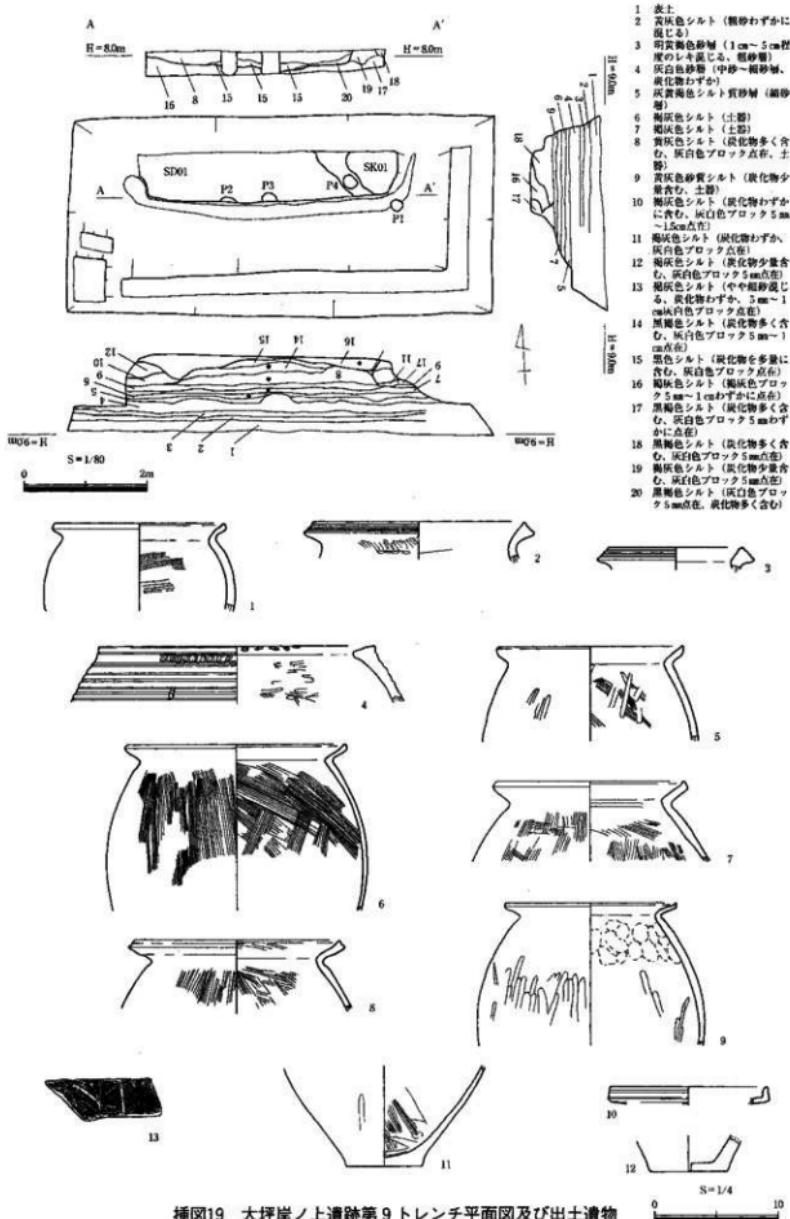
ピット群

このトレンチではピットを4基検出している。ピット1は柱根が遺存しているが、排水溝を掘り下げている途中で検出したため掘り方については明確にすることはできなかった。ピット2、3はSD01埋没後に掘り込まれている。ピット2の平面はほぼ円形を呈し、径27cm、深さ37cmを測る。またわずかではあるが柱根の木質が遺存していた。ピット3は径27cm、深さ43cmを測る。ピット4は検出するにとどまったが、埋土に第9層の黄灰色シルト層を含むことから第7層以降に掘り込まれたものと想定される。

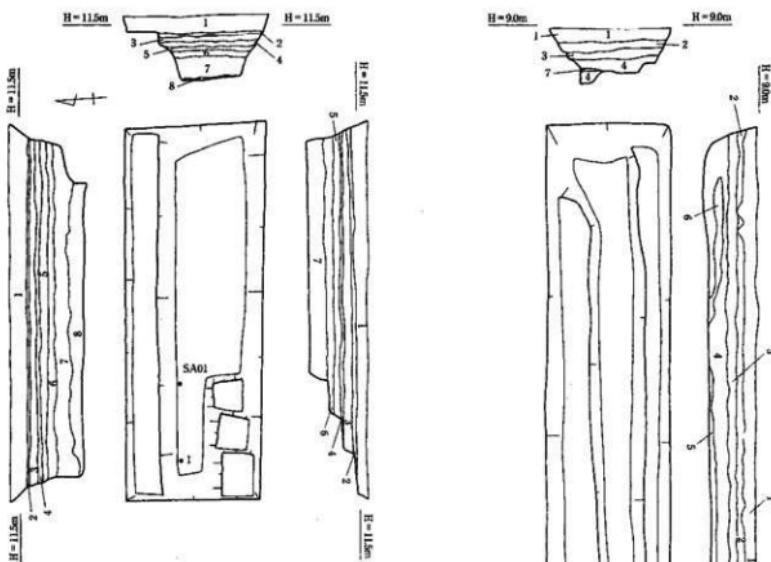
3. 遺物

このトレンチでは弥生土器がコンテナ4箱程度出土している。1、2は第6層中より出土したものである。1は口縁部く字状を呈し、端部はわずかにつまみ出す。内面はハケ目を施し、外面は不明である。形状から台付壺の可能性が考えられる。2は断面三角形を呈し、凹線文が3条施される。3は第7層から出土したものである。口縁部は断面三角形を呈し凹線文が3条施される。4は無頸壺である。第6、第7層は松井編年IV様式^{註3)}の範疇と考えられる。5から12はSD01中より出土したものである。ややまとまって出土しているが、わずかな面積しか掘り下げていないため、接合するものは少ない。5から9は凹線文が未発達であることから松井編年III様式に比定される。10は断面L字状を呈し、1条の凹線文を施す。形態から但馬北部あるいは丹後半島あたりからの搬入品と考えられる。11、12は底部である。11は外面ミガキ、内面ハケ目調整後ミガキを施す。12は底部のはば中央部分に径0.4cmの穿孔を施す。いずれも松井編年III期に相当すると考えられる。13は線刻のある砾である。表面に2条の線刻を施し、そのうち1条から斜めに派生する線刻を施している。そのほかの遺物として、珪化木が出土している。近辺で採取できないことから、搬入品と考えられる。

註3)『古代吉備 第19集』「東の土器、南の土器」松井 肇 1997年

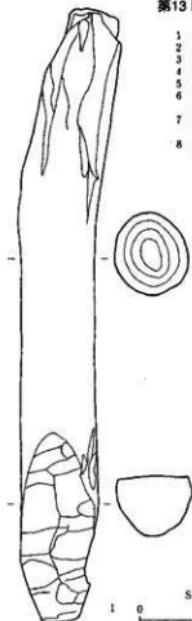


插図19 大塚崖ノ上遺跡第9トレンチ平面図及び出土遺物



第13トレンチ

- 表土
- 明黄褐色シルト (マンガン灰、よくしまる)
- 灰青褐色シルト (マンガン灰、よくしまる)
- 灰青褐色シルト (鉄酸化物灰、よくしまる)
- 黄灰色シルト (鉄酸化物灰)
- 褐灰色シルト (粗粒ブロック灰に變じる。5 mm程度の鉄酸化物ブロック灰がわずかに点在)
- 褐灰色シルト (炭化物点在、1 cm程度の石わづか)
- 褐灰色シルト (細砂を少數含む、1 cm~2 cm程度の石わづか)



第14トレンチ

S = 1/80 2m

- 表土
- にぶい黄褐色~灰青褐色シルト (鐵酸化物灰)
- にぶい黄褐色砂質シルト (粗砂少量含む、1 cm程度の石点在)
- 灰青褐色~にぶい黄褐色砂質 (中砂から粗砂が中心をなす、質にむかい砂物~粗砂に変わる。下部にも粗砂あり、先生土層、土面層)
- 褐灰色砂質 (粗砂~小レキ層、1 cm~こぶし大程度のレキ層)
- 褐灰色砂質 (粗砂~小レキ混じる)
- 褐灰色砂質 (粗砂層、レキわずかに混じる)

挿図20 大坪岸ノ上遺跡第13・第14トレンチ平面図及び第13トレンチ出土遺物

第13トレンチ

1. トレンチの概要

このトレンチは開発区域内南東側に2.4m×6.0mの規模で設定し、掘り下げを行った。第1層から第4層までは近現代の水田と考えられる。第5層は粗砂をわずかに含む黄灰色シルト層である。この層からは土師器片が出土している。第6層は土師器片を含む褐灰色シルト層である。褐色ブロックが点在し、かつて耕作が行われていたと考えられる。第7層は褐灰色シルト層である。この層では弥生土器と考えられる土器片が出土している。トレンチの北西で杭列を検出した。第8層は細砂を含む褐灰色シルト層である。この層以下は湧水が著しく掘り下げを断念せざるを得なかった。

2. 造構

杭列を1基検出している。杭列は東西方向に2点検出したが、全体については不明である。また時期については杭のあった層中より弥生土器細片2点を検出していることから、弥生時代が推定される。

3. 遺物

弥生土器片及び土師器片と須恵器片がわずかに出土している。1は杭列に使用されていた木材である。自然木の先端を加工している。

第14トレンチ

このトレンチは開発区域中央部の第9トレンチの東側約20mの位置に2.0m×14.0mの規模で設定し、掘り下げを行った。第1層から第3層間では近現代の水田と考えられる。第4層以下は細砂及び粗砂を中心とする砂層である。第4層は砂層で西側に向かって徐々に薄くなり、西端で消滅する。第5層は粗砂や拳大程度の礫を含む砂層である。この層は東に向かって傾斜していく。このトレンチは当初第9トレンチに続く造構を想定していたが、確認することはできなかった。

2. 造構

このトレンチでは造構を検出することはできなかった。

3. 遺物

このトレンチでは土師器細片、須恵器細片、弥生土器細片が出土している。いずれも砂層中より出土したため、磨耗が著しく、図化できるものはなかった。

番田寺示ヶ崎遺跡出土遺物一覧

トレンチ番号	遺物番号	出土位置	器種	口径(cm)	最高(cm)	底部径(cm)	形態上の特徴及び手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考	取上番号
T 5	19	木器裏 高床	復原部 灰瓦		△5.8		両端膨大型。内面ナガテ腹脛。2方向から連結によるくびきがある。	赤土	良	内外面青灰 色		233
T 5	20	不明	復原部 灰瓦	底10.3	△1.4		底部は丸く収める。内側にえりが付く。	赤土	良	内外面青灰 色		122
T 5	21	木器裏 灰瓦					外縁平行タキ目。内面同心円文。	赤土	良	内外面青灰 色		301
T 5	22	木器裏 灰瓦			△15.4		口縁膨大型。外蓋ハケ目。内面調整不良。底部は丸底である。	赤土	やや不良	内外面青 色		178

青谷上寺地遺跡出土遺物一覧

トレンチ番号	遺物番号	出土位置	器種	口径(cm)	最高(cm)	底部径(cm)	形態上の特徴及び手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考	取上番号
T 2	1	第9層	土器部 灰瓦	底11.6	2.0	△6.0	口縁膨大外反気泡に立ち上がる。底部に回転赤切り底を残す。	赤土	良	内外面にぶ い黄褐色		7
T 2	2	第10層	土器部 灰瓦		△1.1	△6.5	底部からわずかに外反気泡に立ち上がる。底部に回転赤切り底を残す。	赤土	良	内外面青 色		6

大坪岸ノ上遺跡出土遺物一覧

トレンチ番号	遺物番号	出土位置	器種	口径(cm)	最高(cm)	底部径(cm)	形態上の特徴及び手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考	取上番号	
T 4	1	不明	土器部 灰瓦	底7.0	1.5	△5.4	底部からわずかに外反気泡に立ち上がる。底部に回転赤切り底を残す。	赤土	良	内外面黄 褐色		44	
T 4	2	SK01	土器部 灰瓦		△0.8	6.1	底部から外反気泡に立ち上がる。底部に回転赤切り底を残す。	赤土	良	内外面暗 黄色		27	
T 4	3	SK01	土器部 灰瓦		△1.7	△8.0	底部をなくし、今や外反気泡に立ち上がる。底部に回転赤切り底を残す。	赤土	良	内外面浅黄 褐色		42	
T 4	4	不明	土器部 灰瓦		△1.6	△6.2	底部から外反気泡に立ち上がる。底部に回転赤切り底を残す。	赤土	良	内外面浅黄 褐色		2	
T 4	5	不明	土器部 灰瓦		8.0	1.5	6.0	底部から外反気泡に立ち上がり。全体的にゆがむ。底部に回転赤切り底を残す。	赤土	良	内外面にぶ い黄褐色		1
T 4	6	第5層	土器部 高台付灰 瓦		△1.6	△6.0	0.6cmの高台が付く。	赤土	良	内外面浅黄 褐色		32	
T 4	7	第4層	反瓦土器 羽輪	底29.3	△3.9		内面墨印。断面三角形の脚がつく。口縁脚はやや高台に上げる。	赤土	良	内外面白色 内面深褐色	外面上寸付管	43	
T 9	1	第6層	陶生土器 盤	底14.2	△7.2		口縁脚はなく字状を呈し。脚部は僅かにつまみ出す。内面はハケ目。外縁不規則。	赤土	良	内外面明海 色		4	
T 9	2	第6層	陶生土器 盤	底17.0	△3.1		口縁脚は断面三角形を呈す。外縁3条の凹溝を施す。脚部はミガキ。	赤土	良	内外面にぶ い黄褐色		73	
T 9	3	第7層	陶生土器 盤	底11.0	△1.8		口縁脚は断面三角形を呈す。内面は墨印ナメ。底部にケズリを残す。	赤土	良	内外面弱明 色		5	
T 9	4	不明	陶生土器 盤	底22.4	△4.6		口縁脚は内傾する形をもち、その間に厚肉を施す。外縁に3条の凹溝を施す。D字形の研究を施す。2条の脚柱を貼り付け、7条の回転文を施す。内面ハケ目。ミガキを施す。	赤土	良	内外面褐色		70	
T 9	5	SD01	陶生土器 盤	底16.0	△7.7		口縁脚はなく字状を呈し。脚部は僅かにつまみ出す。内面はハケ目。ミガキを施す。外縁は脚柱。	赤土	良	内外面褐 色		76	
T 9	6	SD01	陶生土器 盤	17.8	△13.5		口縁脚はなく字状を呈し。脚部は僅かにつまみ出す。内面墨とモルタル。	赤土	良	内外面明海 色	赤土に金糸合 む	106	
T 9	7	SD01	陶生土器 盤	底15.0	△6.5		口縁脚はなく字状を呈し。脚部は僅かにつまみ出す。内面墨とモルタル。	赤土	良	内外面黑 色		61	
T 9	8	SD01	陶生土器 盤	底16.6	△5.8		口縁脚はなく字状を呈し。脚部は僅かにつまみ出す。外縁脚柱とハケ目。内面脚柱とハケ目。	赤土	良	内外面褐色	赤土に金糸合 む	93	
T 9	9	SD01	陶生土器 盤	底13.6	△11.6		口縁脚はなく字状を呈し。脚部は僅かにつまみ出す。外縁脚柱とハケ目。内面脚柱から脚部にかけて墨印压痕がある。脚部はミガキを施す。	赤土	良	内外面褐 色	赤土に金糸合 む	84	
T 9	10	SD01	陶生土器 盤	底12.6	△1.5		口縁脚は断面3角形を呈す。外縁1角の凹溝を施す。脚部にハケ目。	赤土	良	内外面黄 褐色	輸入品の可能性	33	
T 9	11	SD01	陶生土器 盤		△8.5	6.1	底部から外反気泡に立ち上がる。外縁ミガキ。内面ハケ目後ミガキ。	赤土	良	内外面褐色		76	
T 9	12	SD01	陶生土器 盤		△3.0	6.1	底部から外反気泡に立ち上がる。底部に径0.4cmの穿孔を施す。	赤土	良	内外面にぶ い褐色		94	

註…復元した計測値に波印、残存値に△印を付した。

大坪岸ノ上遺跡石製品一覧

トレンチ番号	遺物番号	出土位置	器種	長	幅	厚	備考	取上番号
T 9	13	不明	刻印のある盤	8.5	3.2			2

表2 出土遺物一覧表(1)

善田傍示ヶ崎遺跡木製品一覧

トレンチ番号	遺物番号	出土位置	器種	長	幅	厚	樹種	備考	取上番号
T 1	1 沙層	馬形		17.8	3.5	0.4	杉	脚 1	59
T 1	2 沙層	馬形		14.5	2.5	0.5	杉	脚 1	102
T 1	3 沙層	馬形		16.8	2.8	0.6	杉	脚 1	240
T 1	4 沙層	馬形		20.1	3.3	0.6	杉		306
T 1	5 沙層	馬形		16.5	2.5	0.5	杉	脚 1	276
T 1	6 沙層	馬形		14.9	2.7	0.5	杉	脚 1	150
T 1	7 沙層	馬形		16.3	2.5	0.8	杉	脚 1	275
T 1	8 沙層	馬形		19.2	2.7	0.6	杉	脚 1	103
T 1	9 沙層	馬形		11.3	1.8	0.5	杉	脚 1	185
T 1	10 沙層	馬形		19.3	3.2	0.5	杉	脚 1	140
T 1	11 沙層	馬形		19.8	3.4	0.6	杉		270
T 1	12 沙層	馬形		26.9	3.5	1.0	杉		63
T 1	13 沙層	馬形		14.3	3.6	0.5	杉		180
T 1	14 沙層	馬形		10.5	2.4	0.5	杉	脚 1	58
T 1	15 不明	鳥形		16.6	1.9	1.0	杉		363
T 1	16 沙層	人形		7.3	3.2	0.5	杉	頭部	90
T 1	17 沙層	人形		10.3	1.8	0.5	杉	頭部	38
T 1	18 沙層	人形		32.4	3.5	0.4	杉	頭部	260
T 1	19 沙層	人形		27.2	3.7	0.4	杉	頭部	70
T 1	20 沙層	人形		13.1	2.4	0.5	杉	頭部	190
T 1	21 沙層	人形		8.7	3.2	0.3	杉	頭部	85
T 1	22 不明	人形		10.3	1.9	0.3	杉	頭部	334
T 1	23 沙層	人形		61.0	2.5	0.6	杉	全身	45-46
T 1	24 沙層	査串		36.4	1.0	0.8	杉		76-77
T 1	25 沙層	査串		14.4	1.4	0.4	杉		259
T 1	26 沙層	査串		11.7	1.7	0.6	杉		75
T 1	27 沙層	査串		26.7	2.0	0.5	杉		120
T 1	28 沙層	査串		29.6	0.9	0.5	杉		25
T 1	29 沙層	査串		28.0	1.0	0.6	杉		43
T 1	30 不明	査串		16.9	2.6	0.7	杉		1
T 1	31 沙層	査串		12.4	0.9	0.8	杉		104
T 1	32 沙層	査串		19.3	2.0	0.6	杉		47
T 1	33 沙層	曲物	径17.5		0.6	ヒノキ	側面2.0cm		100
T 1	34 沙層	曲物	径17.8		0.8				40-41
T 1	35 沙層	用途不明品	33.4	2.2	0.7	杉			16-19
T 2	1 マコモ層	下下點?		52.0	6.4	2.4	杉	三カ所に穴	27
T 2	2 オリーブ色	査串		11.2	2.1	0.5	杉	脚 1	14
T 2	3 オリーブ色	査串		9.0	1.3	0.6	杉		16
T 4	1 灰オリーブ	人形		32.7	4.1	0.6	杉		11
T 4	2 灰オリーブ	用途不明品		27.2	3.1	2.0	杉	一方所に穴	10
T 4	3 灰オリーブ	馬形		16.9	2.3	0.5	杉	脚 1	12
T 5	1	糸織査		6.8	2.9	0.3	杉		273
T 5	2	馬形		20.8	3.1	0.6	杉		424-423
T 5	3 不明	馬形		20.0	2.3	0.8	杉		122
T 5	4 不明	馬形		19.7	2.7	0.5	杉		8
T 5	5	査串		24.0	0.7	0.5	杉		379-500
T 5	6	査串		15.8	0.8	0.4	杉		369-547
T 5	7	査串		30.7	1.0	0.7	杉		426-550
T 5	8	査串		18.1	2.0	0.4	杉		517-542
T 5	9	査串		25.8	0.7	0.5	杉		229-259
T 5	10	査串		15.3	1.2	0.5	杉		244-298
T 5	11	査串		15.7	1.9	0.6	杉		232
T 5	12	査串		18.0	1.2	0.5	杉		530-536
T 5	13	査串		17.1	1.2	0.3	杉		255-585
T 5	14	査串		19.6	0.6	0.8	杉		34
T 5	15	用途不明品		9.4	3.2	2.5		断面台形状を呈す	300
T 5	16	用途不明品							560

青谷上寺地遺跡木製品一覧

トレンチ番号	遺物番号	出土位置	器種	長	幅	厚	樹種	備考	取上番号
T 3	1 第10層	木棟		5.4	径1.1				61
T 3	2 第14層	板		69.4	径4.3	杉			138

大坪岸ノ上遺跡木製品一覧

トレンチ番号	遺物番号	出土位置	器種	長	幅	厚	樹種	備考	取上番号
T 1	1SD01	下下點		31.4	12.0	2.0			8
T 1	1SA01	板		50.1	径6.4				7

表3 出土遺物一覧表(2)

第5章　まとめ

1. 善田傍示ヶ崎遺跡

善田傍示ヶ崎遺跡は平成15年度から平成16年度にかけて試掘調査を実施し、わずかな面積の試掘調査だったが、斎弔、馬形、人形などの奈良期の木製祭祀具が大量に出土した。その木製品のほとんどが祭祀具であり、斎弔86点、馬形28点、人形15点である。なお斎弔は欠損している物が多く、現場で判断できたものあげているので実際にはやや減少するかもしれない。

今回の試掘調査では第1トレンチでは、粗糲層が厚く堆積し、その中に祭祀具を大量に含んでいることから、露谷川の縁辺として捉えることができる。また第5トレンチでは巨石の脇に斎弔がまとまって出土しているが、意識的に置かれているとは言いがたく、上部より流れてきたものと考えられる。しかし、第5トレンチでは接合するものが14点あり、第5トレンチ周辺で祭祀が行なわれ、第1トレンチに祭祀具が漂着したと考えることができる。また、開発区域南側で行ったハンドオーバーでも遺物包含層と考えられる土層を確認し、日置川に近い第2、第4トレンチでもわずかながら祭祀具が出土していることから開発区域全域に広がる可能性がある。今回の試掘調査で祭祀場周辺とそこから流出した祭祀具が堆積した場所が確認できたことは非常に大きな成果であると言える。

このほか青谷町内で奈良期の木製祭祀具が出土した遺跡は青谷上寺地遺跡が挙げられ、国道調査2区、A調査区、O調査区、町試掘調査の第5トレンチ、第9トレンチである。O調査区は善田傍示ヶ崎遺跡の北側に位置しているため、今回の調査地から漂着した可能性はあるが、その他の調査地は遺跡の西側に位置し、今回の調査地とは異なる地点から流されたものと考えられ、善田傍示ヶ崎遺跡とは別のルートがあると考えられる。

今回の調査では律令祭祀を行なったと考えられる場所についておおよそ露谷川流域と想定できるが、祭祀を行った集団がどこにいたのかは確認できていない。また古代山陰道の駅と考えられる相屋神社が1km程度はなれた位置にあり、そことの関連も今後の課題である。今後の発掘調査によってさらに解明されることに大きく期待をしたい。

2. 青谷上寺地遺跡

今回の試掘調査は町営住宅建設工事、下水道管渠工事、青谷中学校改築工事及び個人住宅建設工事に伴い実施している。

町営住宅建設工事は掘り下げを行ったものの壁面の崩壊等により詳細な調査を実施するに至らなかつた。周辺で行われた調査と比較すると共同墓場建設時の地盤改良により、遺物包含層は掘削されていると考えられる。

下水道管渠工事はマンホール部分の調査であり、わずか4m²と狭く、遺構を検出するには至らなかつた。しかし近隣の発掘調査で平安時代前期の遺構が検出されており、また今回の調査では中世の遺物が出土していることから平安から中世の遺物包含層が調査地にも広がっていることが想定される。平成14年度に実施されたO調査区と比較すると、調査地は弥生時代には水面下の段階であったと考えられる。

青谷中学校改築工事では弥生時代中期末の水田跡を検出している。しかし、プラントオバールの密度は低く、長く使用されていたとは考えにくく、一時的なものと考えられる。

個人住宅建設工事の調査はわずか5m²と狭く、十分な調査が行われたとは言い難い。しかし、これまで周辺の住宅地の試掘調査は行われておらず、今回の調査によってわずかではあるが、成果を得ることができた。

青谷上寺地遺跡周辺はここ近年開発事業によって大きく変化しつつある。平成10年度に一般国道9号

青谷羽合道路改築工事及び一般県道青谷停車場井手線の発掘調査が実施されて以来、周辺の工事が増加傾向にあるため、更なる遺跡保護を図っていく必要がある。また現段階では遺跡の範囲が明確に示されおらず、更なる調査により範囲の確定や遺跡の全体像の解明が行われ、国史跡の指定がなされることを切に願う。

3. 大坪岸ノ上遺跡

大坪岸ノ上遺跡は県営は場整備に伴い試掘調査を実施し、弥生時代中期の遺構や中世の遺構を検出した。開発面積が広域であるため、来年度も試掘調査を実施する予定である。日置谷地区は昭和24年には場整備がなされているが、当時は機械等を使用しておらず、現在でも旧地形を読み取ることができる。日置谷地区は日置からの谷が急に開ける場所にあり、平野の中央部分に自然堤防状の高まりがあり、その東西に河川が流れていと推定される。現在でも平野の中央部分が高く、その東西が低くなっている。また現在河川は存在しないが、平野の西側にある大坪集落に岸ノ上という小字が残っていることも集落近辺に旧河川の存在を想定させる要因である。今回の調査で確認した遺構はこの自然堤防状の高まりの上に立地しており、今年度確認できなかった自然堤防状の高まりをさらに精査する必要がある。また確認した遺構はやや深い位置から確認しているものもあり、開発側と更なる協議を進め、遺跡の保存を図りたい。

〈参考文献・引用文献〉

- 『青谷上寺地遺跡1・2』財団法人 烏取県教育文化財団 2000年
- 『青谷上寺地遺跡3』財団法人 烏取県教育文化財団 2001年
- 『青谷上寺地遺跡4』財団法人 烏取県教育文化財団 2002年
- 『青谷上寺地遺跡5』鳥取県埋蔵文化財センター 2002年
- 『青谷上寺地遺跡6』鳥取県埋蔵文化財センター 2003年
- 『青谷上寺地遺跡7』鳥取県埋蔵文化財センター 2004年
- 『青谷町誌』青谷町誌編さん委員会 1984年
- 『青谷町内遺跡発掘調査報告書V』青谷町教育委員会 1996年
- 『青谷町内遺跡発掘調査報告書VI』青谷町教育委員会 1997年
- 『青谷町内遺跡発掘調査報告書VII』青谷町教育委員会 1998年
- 『青谷町内遺跡発掘調査報告書VIII』青谷町教育委員会 1999年
- 『青谷町内遺跡発掘調査報告書IX』青谷町教育委員会 2000年
- 『青谷町内遺跡発掘調査報告書X』青谷町教育委員会 2001年
- 『青谷町内遺跡発掘調査報告書XI』青谷町教育委員会 2002年
- 『青谷町内遺跡発掘調査報告書XII』青谷町教育委員会 2004年
- 『大口古墳群発掘調査概報』青谷町教育委員会 1980年
- 『大口遺跡群発掘調査報告書』青谷町教育委員会 1985年
- 『大口古墳群発掘調査報告書』青谷町教育委員会 1989年
- 『カヤマ遺跡発掘調査報告書』青谷町教育委員会 1982年
- 『旧石器・縄文時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター 1988年
- 『鳥取県史 I 原始・古代』鳥取県
- 『鳥取県の古墳』鳥取県埋蔵文化財センター 1986年
- 『鳴滝宮ノ前遺跡発掘調査報告書』青谷町教育委員会 2000年
- 『弥生時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター 1988年

第6章 自然科学分析の結果について

善田榜示ヶ崎遺跡出土の曲物底板の年輪年代

独立行政法人 奈良文化財研究所 光谷拓実

平成15年度の発掘調査では、堆積土層の砂層中②から、ヒノキの曲物底板が出土した。底板の木取りは極目で、年輪密度の高い良材が使われていた。

このたび、この底板の年輪年代調査を依頼され、年代測定をおこなったところ、年輪年代が確定したので、以下にその概略を報告する。

方法

底板の年輪計測は、専用の年輪読取器（実体顕微鏡付き、0.01ミリまで計測）を使って、非接触、非破壊でおこなった。

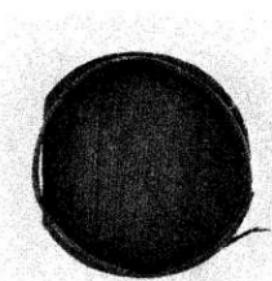
ヒノキの暦年標準パターンは、おもに平城宮跡出土の柱根類から計測収集した年輪データを使って作成した883年分の暦年標準パターン（紀元前37年～845年）を用いることとした。コンピュータによる年輪パターンの照合は、時系列解析に用いられる相関分析手法¹⁾によった。当研究所では年輪パターン照合の成否の目安として、t検定による最大t値をt>5.0としている。さらに、最大t値の年代位置で2つの年輪バターングラフを詳細に比較し、正しく一致しているかどうかを確認したのちに、最終決定を下すこととした。

結果

計測年輪数は259層、心材に続く辺材部は完全に失われている形状のものであった。ヒノキの暦年標準パターンとの照合の結果、両者の年輪パターンは高い類似度（t値=6.6）で合致し、残存最外年輪測定年代は632年と確定した。

底板に成形するときに、その外側がどの程度削除されたかは不明であるが、失われた辺材部のなかには50層前後、年輪が刻まれていたものと推定される。したがって、削除された年輪数を加算すると、700年代に入ってからの伐採年が推定できるので、この曲物は奈良時代初めのものの可能性が高い。

- 1) 光谷拓実、他「年輪に歴史を読む—日本における古年輪学の成立—」奈良文化財研究所学報第48冊、



年輪年代測定試料



年輪年代測定試料拡大写真

I. 青谷上寺地遺跡及び善田傍示ヶ崎遺跡における植物珪酸体（プラント・オパール）分析

1.はじめに

この調査は、青谷上寺地遺跡、善田傍示ヶ崎遺跡における稻作ならびに堆積環境について、植物珪酸体から検討を行ったものである。

2. 試料

青谷上寺地遺跡分析試料は、調査区西壁において上位より8層～17層までの各層で採取された10試料と、北壁で確認された溝状遺構（SD02）より採取された1試料の計11点の堆積物である。

善田傍示ヶ崎遺跡分析試料は、分析試料は、第1トレンチでは上位より黄褐色シルト（9層）、粗砂（10層）、暗灰黄色砂質シルト（11層）、灰色粘土（12層）の上部と下部の5点、第2トレンチでは上位より黒褐色シルト（10層）、にぶい褐色シルト（11層）、灰オリーブ色シルト（12層）、灰褐色粘土（13層）の4点、第4トレンチでは上位より明黄褐色シルト（6層）、灰オリーブ色シルト（7層）、オリーブ黒色粘土（8層）の3点、第5トレンチでは上位より灰褐色粘質シルト（8層）、褐灰色シルト（9層）、黒褐色砂質シルト（10層）、黒褐色シルト（11層）の4点の計16点が採取された。

3. 分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で行った。1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾） 2) 試料約1gに直径約40μmのガラスピーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量） 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来する植物珪酸体を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中の植物珪酸体個数（試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻⁵g）を乗じて、単位面積で厚層1cmあたりの植物体生産量を算出した。各植物の換算計数はそれぞれイネ（赤米）は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節型は1.16、ネザサ節型は0.48、クマザサ属型（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節型は0.30である。

4. 結果

青谷上寺地遺跡の分析試料から検出された植物珪酸体は、イネ、ヨシ属、ススキ属型、タケア科（メダケ節型、ネザサ節型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表5と挿図21、22に示す。

善田傍示ヶ崎遺跡の分析試料から検出された植物珪酸体は、イネ、ヨシ属、ススキ属型、タケア科（メダケ節型、ネザサ節型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表6と挿図23～26に示す。

5. 稲作と植生

青谷上寺地遺跡西壁では、上位より8層～15層までの連続する各層でイネの植物珪酸体が検出されている。これらのうち、8層、9層、10層、11層および13層では植物珪酸体密度がそれぞれ6,200個/g、3,500個/g、4,200個/g、3,000個/g、3,000個/gであり、いずれも稲作跡の可能性を判断する際の基準値とされる3,000個/gあるいはそれを上回っている。したがって、これらの層準では調査地において稲作が行われていた可能性が高いと判断される。また、12層では2,400個/gと比較的高い密度であることから、当該層についても水田耕作層である可能性が考えられる。下位の14層と15層では植物珪酸体密度はともに1,200個/gと低いものの、いずれも畦畔状の盛り上がりが確認されている。このことから、これら2層についても水田跡である可能性が考えられる。なお、両層が水田耕作上であるにも関わらずイネのプラント・オ・パール密度が低いことにに関しては、1) 稲作が営まれた期間が非常に短かった、2) 稲葉の多くが耕作地の外に持ち出されていた、3) 土層の堆積速度が速かった、4) 耕作土が流失したなどの要因が考えられる。

一方、北壁のSD02からもイネの植物珪酸体が3,800個/gの高密度で検出されている。このことから、当該溝は水田にともなう溝であるか、もしくは近傍に水田が存在しており、そこから耕作土とともに植物珪酸体が流れ込んだものと推定される。

イネ以外の分類群では、ヨシ属が13層で比較的高い密度である。したがって、当該層堆積時の調査地近傍は湿地もしくはそれに近い環境であったと推定される。

善田傍示ヶ崎遺跡の第1トレーナーでは、上位より9層～12層までの各層でイネの植物珪酸体が検出されている。これらのうち、12層上部では植物珪酸体密度が4,500個/gであり、稲作跡の可能性を判断する際の基準値である3,000個/gを超過している。さらに、直上層よりも高い密度でありピークを形成している。このことから、当該層が水田耕作層であった可能性は高いと判断される。10層と11層では植物珪酸体密度がそれぞれ2,300個/g、2,500個/gと比較的高い値であり、いずれも小さいながらもピークとなっている。こうしたことから、これらの層準においても調査地において稲作が行われていた可能性が考えられる。なお9層については、植物珪酸体密度が1,000個/gと低い値であることから、稲作跡である可能性を積極的に肯定することはできない。

第2トレーナーでは、10層～13層の各層でイネの植物珪酸体が検出されている。10層では植物珪酸体密度が3,400個/gと高い値であることから、当該層において稲作の行われていた可能性が高いと考えられる。11層では植物珪酸体密度は2,200個/gと比較的高いことから、ここでも稲作が行われていた可能性が考えられる。ただし、直上の6層がより高い密度であることからそこからの混入である危険性も否定できない。13層では植物珪酸体密度は1,800個/gとやや低いものの、ピークが認められることから、当該層では調査地もしくは近傍において稲作が営まれていた可能性が考えられる。なお、12層については600個/gと低い密度であることから、上層等からの混入と思われる。

第4トレーナーでは、6層、7層、8層の各層でイネの植物珪酸体が検出されている。7層では3,700個/gと高い植物珪酸体密度であり、ピークとなっている。したがって、当該層については稲作跡である可能性が高いと考えられる。6層と8層では植物珪酸体密度が800個/gと1,500個/gと低密度であることから、他所からの混入である危険性が高い。

第5トレーナーでは、8層、9層、10層および11層でイネの植物珪酸体が検出されている。このうち、9層では植物珪酸体密度は2,200個/gと比較的高い値であり、なおかつピークとなっている。こうしたことから、当該層については稲作跡である可能性が高いと考えられる。他の8層、10層、11層では植物珪酸体密度が1,000個/g以下の低密度であることから、他所からの混入の危険性が高い。

イネ以外の分類群では、ヨシ属が第2トレーナーの10層で非常に高い密度であり、同11層と第5トレーナーの10層で高い密度である。したがって、当該層堆積時の調査地近傍は湿地もしくはそれに近い環境で

あったと推定される。

6.まとめ

青谷上寺地遺跡において植物珪酸体分析を行い、稻作の可能性ならびに堆積環境について検討した。その結果、8層、9層、10層、11層、12層、13層、12層および15層において稲作が営まれていた可能性が認められた。とくに、8層～11層と13層については水田耕作層である可能性が高いと判断された。また、SD02に関しては水田に伴う溝であったか、近傍に水田が存在していたと推定された。

善田傍示ヶ崎遺跡において植物珪酸体分析を行い、稲作の可能性ならびに堆積環境について検討した。その結果、第1トレンチの10層、11層、12層、第2トレンチの10層、第4トレンチの7層さらに第5トレンチの9層において稲作が営まれていた可能性が高いと判断された。また、第2トレンチの11層についても水田耕作層である可能性が認められた。なお、第2トレンチの10層と11層、第5トレンチの10層の堆積時の調査地近傍は湿地かそれに近い環境であったと推定された。

II. 青谷上寺地遺跡及び善田傍示ヶ崎遺跡における珪藻分析

1.はじめに

この調査は青谷上寺地遺跡、善田傍示ヶ崎遺跡における水域を主とした堆積環境を検討することを目的に、珪藻分析を行った。

2. 試料

青谷上寺地遺跡の分析試料は、西壁土層断面の8層～17層で採取された堆積物10点と北壁SD-02より採取された堆積物1点の計11点である。

善田傍示ヶ崎遺跡の分析試料は、第1トレンチの黄褐色シルト（9層）、粗砂（10層）、暗灰黄色砂質シルト（11層）、灰色粘土（12層）の上部と下部の5点、第2トレンチの黒褐色シルト（10層）、にぶい褐色シルト（11層）、灰オリーブ色シルト（12層）、灰褐色粘土（13層）の4点、第4トレンチの明黄褐色シルト（6層）、灰オリーブ色シルト（7層）、オリーブ黒色粘土（8層）の3点、第5トレンチの灰褐色粘質シルト（8層）、褐灰色シルト（9層）、黒褐色砂質シルト（10層）、黒褐色シルト（11層）の4点の計16点である。いずれも植物珪酸体分析に供されたものと同一試料である。

3. 方法

以下の手順で珪藻を抽出し、プレパラートを作成した。

- 1) 試料から乾燥重量1gを秤量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温しながら1晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗
- 4) 残渣をマイクロビペットでカバーグラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
- 6) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1000倍で行った。計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

4. 結果

青谷上寺地遺跡の試料から出現した珪藻は、中塩性種（汽水生種）13分類群、貧塩性種（淡水生種）69分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表7に示す。また珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを挿図27に示す。珪藻分析結果は図に示すように分帶の区分を行った。

善田傍示ヶ崎遺跡の試料から出現した珪藻は、中一真塩性種（汽一海水生種）45分類群、貧一中塩性

種（淡一汽水生種）2分類群、貧塩性種（淡水生種）97分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表8・9に示す。また珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを挿図28~31に示す。分析結果より珪藻分帯の区分を行い図示した。

5. 硅藻分析から推定される堆積環境

青谷上寺地遺跡

(1) 西壁

珪藻分帯に沿って下位より環境の変遷を推定する。

1) I 帯（試料15~17）

流水性種で沼沢湿地付着生指標種群が優占し、陸生珪藻、海水砂質干潟指標種群が伴われる。こうしたことから、珪藻の付着する水草の生育する流水域で、湿った陸域と干潟の隣接する環境が示唆される。

2) II 帯（試料12~14）

止水性種と沼沢湿地付着生指標種群の流水性種が優占し、流水不定性種と海水砂質干潟指標種群が伴われる。淡水の止水域が拡大し、水草の生育する流水域が接する環境が示唆される。陸域と干潟は後退し、淡水の水位の上昇が考えられる。

3) III 帯（試料10~11）

流水性種と止水性種が減少し、流水不定性種が優占し、海水砂質干潟指標種群がやや増加する。珪藻密度は低くなる。こうしたことから、干潟の接する不安定な淡水域で、汀線に近い水域が推定される。

4) IV 帯（試料8~9）

珪藻はほとんど検出されず、珪藻の生育できない乾燥した陸の環境が推定される。

(2) 北壁SD02

流水不定性種が比較的多く、沼沢湿地付着生指標種群の流水性種と止水性種が伴われる。水草が生育する流水になったり止水になったりする不安定な環境が推定される。

善田傍示ヶ崎遺跡

(1) 第1トレンチ

珪藻化石の構成と組成の変化から、下位より3帯の珪藻分帯を行った。

1) I 帯期（12層）

海水泥質干潟環境指標種群、海水藻場環境指標種群および内湾環境指標種群が高率であり、海水砂質干潟環境指標種群、中塩性種（汽水生種）、貧一中塩性種（淡一汽水生種）、沼沢湿地付着環境指標種群で流水性種の貧塩性種（淡水生種）がやや多く伴われる。こうしたことから、干潟から海藻の繁茂するやや浅い内湾の環境が示唆され、近隣に汽水域から水草の繁茂する流水域も分布していたと推定される。潮の干満により外洋の海水の影響もあったと思われる。

2) II 帯期（11層）

流水不定性種を主とする貧塩性種（淡水生種）が優占し、汽水藻場環境指標種群や汽水泥質干潟環境指標種群を主とする中塩性種（汽水生種）が伴われる。よって、不安定な淡水域が分布し、近接して藻の繁茂する浅い汽水域や汽水性の干潟が分布していたと推定される。

3) III 帯期（9層）

汽水泥質干潟・汽水藻場環境指標種群が極めて優占し、海水泥質干潟環境指標種群や止水性種の貧塩性種（淡水生種）が伴われる。汽水性の藻の繁茂する浅い水域から干潟の環境が示唆され、近隣の海水干潟や淡水域からの影響もあったと考えられる。

(2) 第2トレンチ

珪藻化石の構成と組成の変化から、下位より4帯の珪藻分帯を行った。

1) I帯期(13層)

海水泥質干潟環境指標種群が優占し、海水藻場環境指標種群、海水砂質干潟環境指標種群、貧一中塩性種(淡一汽水生種)、貧塩性種(淡水生種)の沼沢湿地付着性環境指標種群の流水性種が伴われる。こうしたことから、堆積地は泥質干潟が示唆され、近隣に藻の繁茂する海水域から海水砂質、汽水域、淡水性の水草の繁茂する流水域の分布が推定される。

2) II帯期(12層)

沼沢湿地付着性環境指標種群の流水性種、中一真塩性種(汽一汽水生種)、中塩性種(汽水生種)、貧一中塩性種(淡一汽水生種)などが出現する。こうしたことから、水草の繁茂する流水性の淡水域を中心、汽水域から海水の影響のある水域が推定される。

3) III帯期(11層)

中塩性種(汽水生種)が極めて優占することから、汽水域の分布が示唆される。

4) IV帯期(10層)

貧塩性種(淡水生種)が優占し、沼沢湿地付着性環境指標種群および流水不定性種が優占する。水生植物の繁茂するやや不安定な浅水域が示唆される。高率に出現する*Amphora copulata*は水田に多い種類である。

(3) 第4トレンチ

1) I帯期(8層)

海水泥質干潟環境指標種群が優占し、海水藻場環境指標種群、海水砂質干潟環境指標種群、貧一中塩性種(淡一汽水生種)、中塩性種(汽水生種)が伴われる。こうしたことから、干潟から海藻の繁茂するやや浅い内湾の環境が示唆される。潮の干満により外洋の海水の影響も想定される。

2) II帯期(7層)

貧塩性種(淡水生種)が多く、沼沢湿地付着性環境指標種群の流水性種で、止水性種、流水不定性種が多く出現し、貧一中塩性種(淡一汽水生種)、汽水藻場・泥質干潟環境指標種群などの中塩性種(汽水生種)が伴われる。こうしたことから、水草の生育する流水域や止水域の淡水域の環境が示唆されるが、汽水域から海水域の影響も受ける環境であったと推定される。

3) III帯期(6層)

中塩性種(汽水生種)卓越し、貧塩性種(淡水生種)が伴われることから、汽水域が示唆され、淡水の影響も受ける環境が推定される。

4) 第5トレンチ

1) I帯期(10層、11層)

流水不定性種の貧塩性種(淡水生種)、海水泥質干潟指標種群、海水藻場環境指標種群、海水砂質干潟環境指標種群の出現率が高く、中塩性種(汽水生種)、貧一中塩性種(淡一汽水生種)が伴われる。こうしたことから、干潟に隣接するやや不安定な淡水域が示唆される。

2) II帯期(8層、9層)

珪藻がほとんど検出されず、珪藻の生育できない乾燥した環境が推定される。

6.まとめ

青谷上寺地遺跡西壁では、下位よりI帯(試料15~17)では湿った陸域と干潟が隣接する水草の生育する流水域が推定され、II帯(試料12~14)になると淡水の止水域と水草の生育する流水域になり、III帯(試料10~11)は干潟と汀線に接する不安定な淡水域に遷移し、IV帯(試料8~9)で珪藻の生育で

きない乾燥した陸の環境が推定される。北壁SD02は水草が生育する流水と止水になつたりする不安定な環境が推定される。

善田傍示ヶ崎遺跡の第1トレンチ、第2トレンチ、第4トレンチ、第5トレンチで採取された堆積物について珪藻分析を行った。その結果、各トレンチとも概ね、下部は干涸を主とする海水の環境であり、中部は淡水域、地点によっては上部で汽水域の環境へ変遷するといった傾向が認められた。

III. 青谷上寺地遺跡及び善田傍示ヶ崎遺跡における放射性炭素年代測定

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 曆年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

曆年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と曆年代較正曲線との交点の曆年代値を意味する。 1σ （68%確率）と 2σ （95%確率）は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

青谷上寺地遺跡

1. 試料と方法

試料名	遺構・資料名	種類	前処理・調整	測定法
No 1	杭材138	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No 2	木材112	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No 3	西壁15層	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No 4	北壁9層	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

2. 測定結果

試料名	測定No (Beta-)	¹⁴ C年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	暦年代(西暦)
No 1	199697	2050±40	-24.2	2060±40	交点: cal BC50 1 σ: cal BC110~30 2 σ: cal BC180~AD30
No 2	199698	2040±40	-24.1	2050±40	交点: cal BC50 1 σ: cal BC100~10 2 σ: cal BC170~AD40
No 3	199699	1910±40	-13.4	2100±40	交点: cal BC110 1 σ: cal BC180~50 2 σ: cal BC200~30
No 4	199700	1260±40	-28.8	1200±40	交点: cal AD810、840、860 1 σ: cal AD780~890 2 σ: cal AD710~910、 cal AD920~960

善田傍示ヶ崎遺跡

1. 試料と方法

試料名	遺構・資料名	種類	前処理・調整	測定法
No 1	砂層②、No112	木材	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No 2	砂層①、No359	木材	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No 3	No290板材	木材	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

2. 測定結果

試料名	測定No (Beta-)	¹⁴ C年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	暦年代(西暦)
No 1	199701	1480±40	-24.2	1490±40	交点: cal AD580 1 σ: cal AD540~620 2 σ: cal AD460~480、 cal AD520~650
No 2	199702	1590±40	-23.5	1610±40	交点: cal AD430 1 σ: cal AD410~460、 cal AD480~520 2 σ: cal AD380~540
No 3	199703	1510±40	-24.7	1510±40	交点: cal AD560 1 σ: cal AD530~610 2 σ: cal AD440~640

表4 放射性炭素年代測定一覧表

検出密度 (単位: ×100個/g)

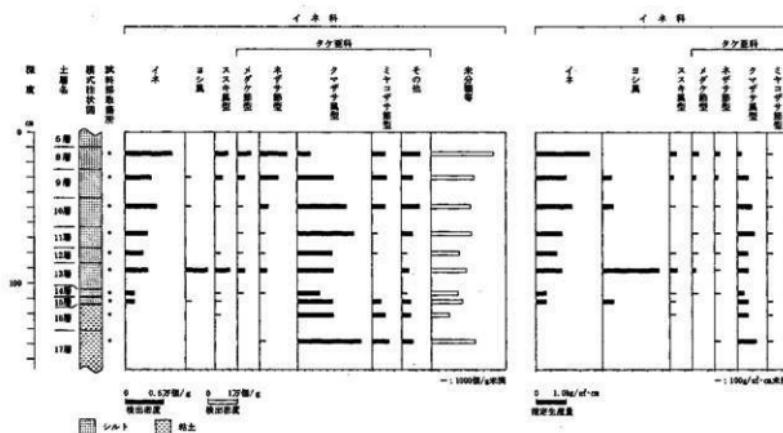
分類群 \ 層位	種名	西壁										SD02
		8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	
イネ科	Gramineae (Grasses)											
イネ	Oryza sativa (domestic rice)	62	35	42	30	24	30	12	12			38
ヨシ属	Phragmites (reed)		5	6			30		6			
ススキ属	Miscanthus type	18	10	6		6	20	6	6	6		16
タケ科	Bambusoideae (Bamboo)											
メダケ属	Pleioblastus sect. Medake	18	10	6	8	6	10	6				5
ネズサ属	Pleioblastus sect. Neanza	37	25	12	8	6	10	6				5
クマザサ属	Sasa (except Miyakozasa)	18	49	66	76	47	49	30	47	49	65	49
ミヤコザサ属	Sasa sect. Miyakozasa	18	20	18	8	8			12	18	23	11
その他	Others	25	15	24	15	6	10	6	12	12	15	11
未分類等	Unknown	209	144	133	136	95	119	90	106	61	147	156
植物珪酸体総数		406	312	314	279	196	277	156	200	143	279	291

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

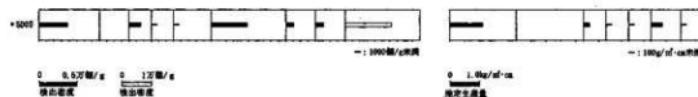
イネ	Oryza sativa (domestic rice)	1.81	1.02	1.24	0.89	0.70	0.87	0.35	0.35		1.11
ヨシ属	Phragmites (reed)		0.31	0.38			1.87				
ススキ属	Miscanthus type	0.23	0.12	0.07		0.07	0.28	0.07	0.07	0.08	0.20
メダケ属	Pleioblastus sect. Medake	0.21	0.11	0.07	0.09	0.07	0.11	0.07			0.06
ネズサ属	Pleioblastus sect. Neanza	0.18	0.12	0.06	0.04	0.03	0.05	0.03			0.03
クマザサ属	Sasa (except Miyakozasa)	0.14	0.37	0.50	0.57	0.36	0.37	0.22	0.35	0.37	0.64
ミヤコザサ属	Sasa sect. Miyakozasa	0.06	0.06	0.05	0.02	0.02			0.04	0.06	0.07

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

表5 青谷上寺地遺跡の植物珪酸体分析結果



挿図21 西壁における植物珪酸体分析結果



挿図22 北壁における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

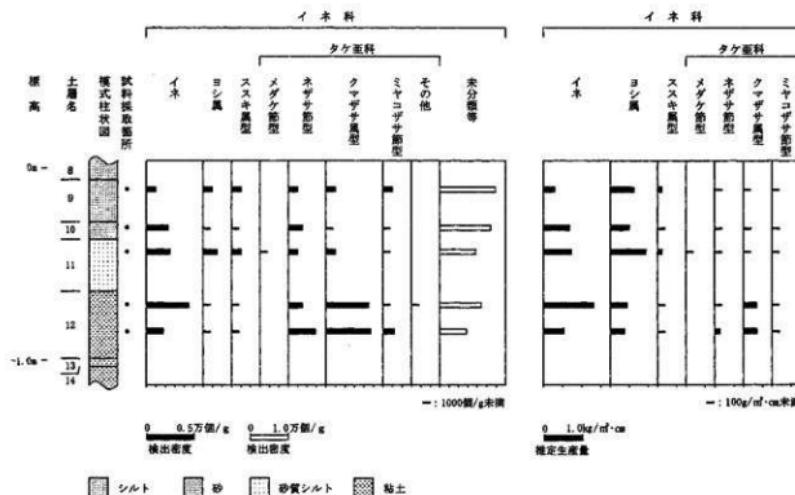
分類群	部位	第1トレンド					第2トレンド					第4トレンド					第5トレンド				
		9	10	11	12-1	12-2	18	19	20	21	22	6	7	8	9	10	11				
イネ科	Gramineae (Gramineae)	10	23	25	45	18	34	22	6	18	8	37	15	7	22	10	10				
イネ	Oryza sativa (domestic rice)	10	8	15	7	8	39	39	12	6	15	15	7	7	39						
ヨシ属	Poaceae (reed)	10	8	15	7	8	39	39	12	6	15	15	7	7	39						
ススキ属	Miscanthus type	10	8	10	7	4	8	15	6	6	8	15			7	10					
タケ科	Bambusoideae (Bamboo)																				
メダケ属	Pleioblastus sect. Medake																				
ネザサ属	Pleioblastus sect. Nusat	10	15	10	15	29															
クマザサ属	Sasa (except Miyakozasa)	10	8	10	45	47	25	15	54	87	8	37	60	15	15	20					
ミヤコザサ属	Sasa sect. Miyakozasa	10	8	5	7	12	8	7	6	6	7	7	7								
その他	Others						7		8	7	6			7	7				10		
未分類等	Unknown	148	136	95	111	71	126	65	90	55	77	90	27	45	39	39	39	39			
被検植物種数		208	204	176	245	189	208	162	197	145	131	210	135	90	82	90	90	90			

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²·cm)

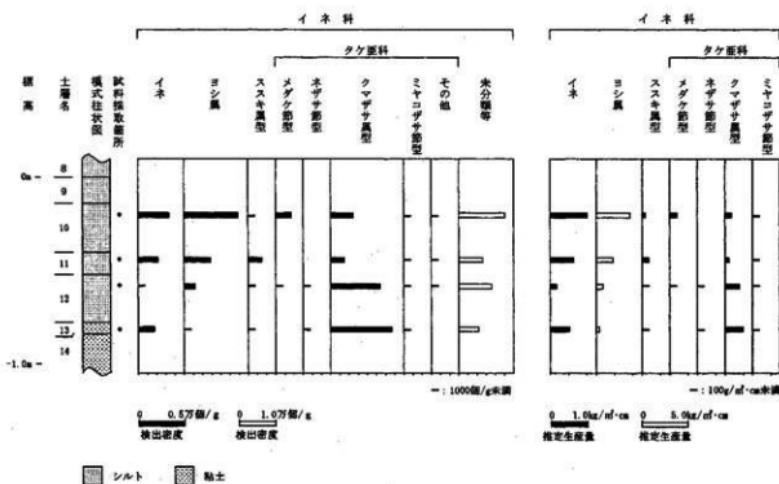
イネ	Oryza sativa (domestic rice)	0.29	0.67	0.74	1.31	0.52	0.99	0.68	0.18	0.54	0.22	1.10	0.44	0.22	0.95	0.29	0.29
ヨシ属	Poaceae (reed)	0.62	0.48	0.95	0.47	0.37	3.71	1.05	0.76	0.38	0.97	0.95	0.47	0.47	1.95		
ススキ属	Miscanthus type	0.12	0.09	0.12	0.09	0.07	0.10	0.16	0.07	0.08	0.10	0.12			0.09	0.12	
メダケ属	Pleioblastus sect. Medake						0.06		0.20	0.07					0.09		
ネザサ属	Pleioblastus sect. Nusat	0.05	0.07	0.05	0.07	0.14					0.02	0.02	0.07			0.07	
クマザサ属	Sasa (except Miyakozasa)	0.07	0.06	0.05	0.33	0.39	0.19	0.12	0.49	0.32	0.06	0.20	0.65	0.11	0.11	0.15	
ミヤコザサ属	Sasa sect. Miyakozasa	0.03	0.02	0.02	0.02	0.04	0.03	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02

被検植物の仮比重を1.0と仮定して算出。

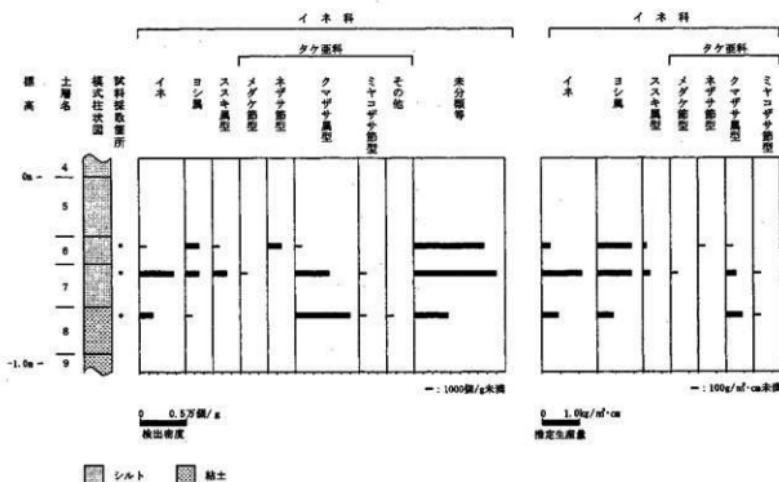
表6 善田傍示ヶ崎遺跡の植物珪酸体分析結果



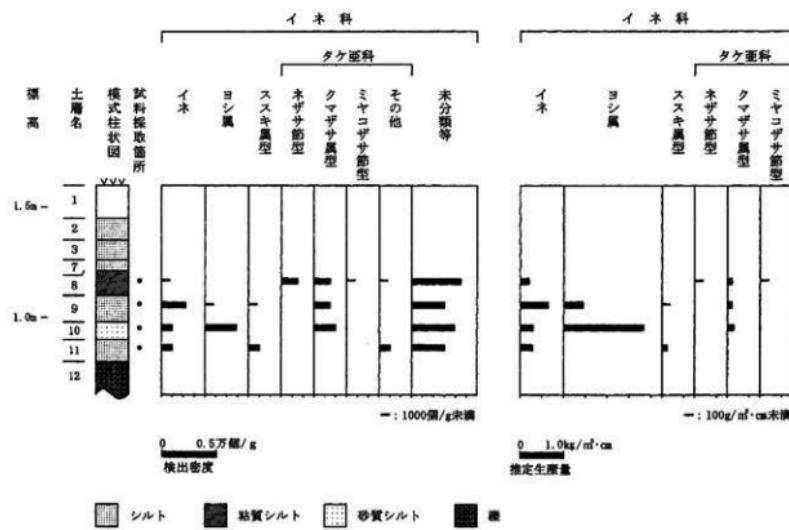
挿図23 第1トレンドにおける植物珪酸体分析結果



挿図24 第2トレンチにおける植物珪酸体分析結果



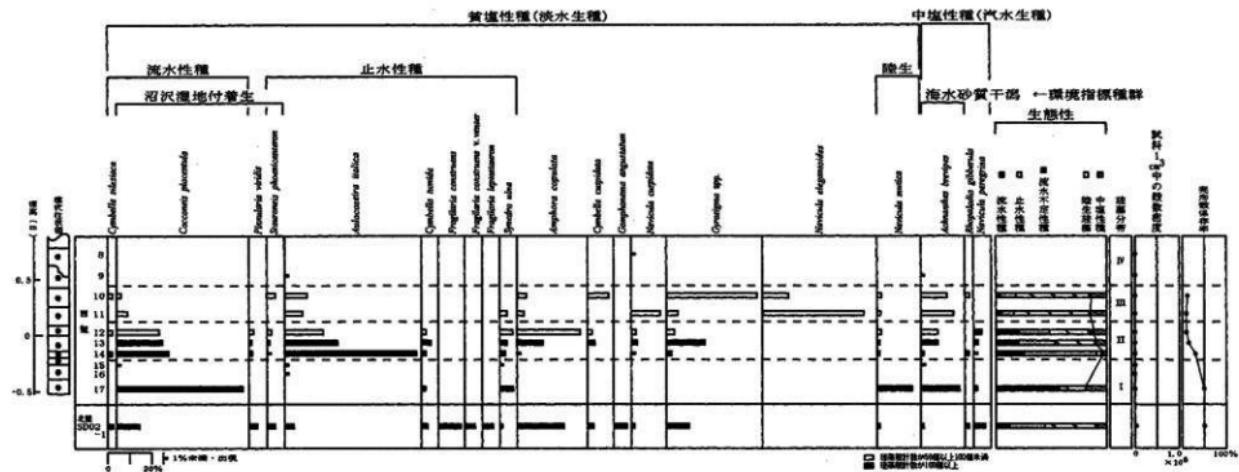
挿図25 第4トレンチにおける植物珪酸体分析結果



挿図26 第5トレンチにおける植物珪酸体分析結果

分類群	四葉										北緯 SD02-1
	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	
被子植物 (完全水生)											
Achondritis inflata											1
Achondritis lemnoides											1
Amphora capicola			2	2	15	11	1				53
Amphora subcapicola											2
Anemoneoides glomerophylla			1	1							
Anemoneoides italicica		1	5	5	9	22	93	7	3		10
Anemoneoides sp.1											3
Calotropis hyacinthina											1
Calotropis latifolia					1						
Calotropis silvana											4
Coccinia grandis			1	3	10	19	37	1	36		25
Cyclotella stellaris											1
Cyclotella sp.											1
Cymbella capitula			6		1	3					7
Cymbella curvula											4
Cymbella stellata		1		1			3				5
Cymbella tenaxa							1				
Cymbella tenuissima											
Diatoma elliptica					1	4	3			1	7
Diploneis belliformis										1	1
Diploneis flexuosa										2	
Diploneis rotunda										2	
Diploneis spp.											2
Diploneis spp.											1
Diploneis sp.											1
Eurybia minor											1
Eurybia primula		1				1				1	2
Eurybia sp.											2
Fragaria capito										1	
Fragaria comosa											2
Fragaria ananassa var. undata											25
Fragaria luteola											12
Comptonia asplenoides											12
Comptonia aquatilis											2
Comptonia dentata			1		2	1					15
Comptonia dentata											
Comptonia gracilis						1					2
Comptonia silvicola											1
Comptonia peregrina							1				1
Comptonia sphaerophylla											2
Comptonia spp.											25
Coryne spp.							1				
Hedera helix											12
Hedera canariensis											12
Nostoc confervoides					1	1	1	1	1		2
Nostoc elegans							1				4
Nostoc giganteum					6	28					1
Nostoc heteroclados											1
Nostoc nudum					1	1	1	2	1		2
Nostoc papulatum										1	2
Nostoc sp.							1				1
Neidium amplissum										1	
Nitzschia brevispinosa								1			1
Nitzschia spp.										1	
Nitzschia terricola										1	
Pinnularia acanthophora			1								6
Pinnularia leptocheila										1	
Pinnularia gibba								2			1
Pinnularia intertexta										2	
Pinnularia major										1	
Pinnularia microstauron										2	
Pinnularia nodosa										1	
Pinnularia viridis							1	1	2		9
Plaeocladus officinalis										4	3
Pseudopediastrum gibbum										1	
Spirogyra aculeata										1	
Spirogyra placentaria					2	1	1	1			9
Stictosiphonia curvirostris										1	
Spirula ulna					2	3	9	4	2		5
中度水深 (汽水交界)											
Achondritis bergeri		1	6	9	4	7	2	1		11	3
Achondritis deflexa											1
Cocconeis scutellata											1
Diploneis setifera											4
Diploneis subtriculata											1
Nostoc capitata v. longicilia											1
Nostoc cruciata											1
Nostoc delta											1
Nostoc peregrina								1		13	
Nitzschia granulata										1	
Rhopalodia gibbera					1			3		1	5
Thalassiosira mitisoides											1
合計	2	3	62	66	55	102	166	12	3	101	305
未確定							3	1		4	7
碎片	31	89	372	630	473	594	414	19	4	103	361
資料 1 cm ² 中の個体密度	4.0	6.0	1.4	1.5	1.6	2.4	4.8	6.2	1.2	2.4	3.1
×10 ³ ×10 ³ ×10 ⁴ ×10 ⁴ ×10 ⁴ ×10 ⁴ ×10 ⁴ ×10 ⁴ ×10 ³ ×10 ⁴ ×10 ³											
光吸收係数 (%)	6.1	3.3	12.3	9.5	10.4	15.0	29.5	41.9	42.8	50.5	56.9

表7 青谷上寺地遺跡西壁・北壁における珪藻分析結果



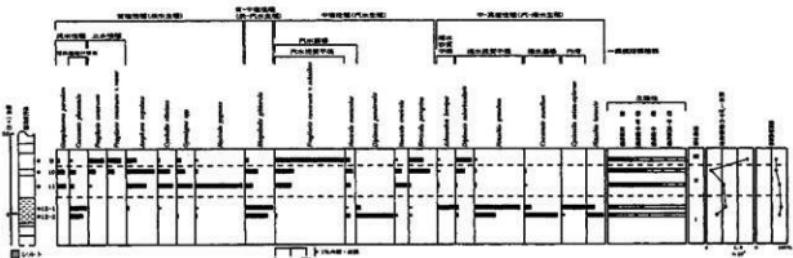
挿図27 青谷上寺地遺跡西壁・北壁における主要珪藻ダイアグラム

分類群	第1トレンチ				第2トレンチ				第3トレンチ				第4トレンチ			
	9	10	11	12-1	12-2	10	11	12	13	6	7	8	9	10	11	
実生性藻(淡水生)																
<i>Achnatherus lemnoides</i>	2	1	3						1			2	1			
<i>Amphiroa capitata</i>	17	33	24	4		51	21	25	5	48	35	4		2	9	3
<i>Amphiroa monstera</i>	4		1				2									
<i>Amphiroa</i> sp.	1				12			11				1				
<i>Amphiroa</i> spp.									3		5					
<i>Anomoeocystis sphacelophora</i>	1	1	1			2	14			3		1				
<i>Andreaea</i> sp.						1	1									
<i>Andreaea</i> spp.	1															
<i>Caloneis tenuillae</i>	2						1									
<i>Caloneis hypoleuca</i>								1								
<i>Caloneis laeta</i>									1							
<i>Caloneis siliculos</i>	5	2	4			9		1			6					
<i>Caloneis</i> spp.	3	1	2						1		1					
<i>Ceratomea plicata</i>	1	7	5	30	17	8	65	26	1	43	10					
<i>Cyclotella meneghiniana</i>							1									
<i>Cyclotella capsicula</i>						2	1	1								
<i>Cyclotella leucosticta</i>	1								1							
<i>Cyclotella nana</i>	6	1				22										
<i>Cyclotella nivaliformis</i>	3	14	18	1		13	2	2	1		4					
<i>Cyclotella ciliata</i>		1	3								2					
<i>Cyclotella niveata</i>																
<i>Cyclotella rubescens</i>						24										
<i>Cyclotella tenuissima</i>	8	4	1	1			3	4	4	5	6		1	1		
<i>Diploneis fennica</i>								1								
<i>Diploneis</i> sp.1						4	16	5								
<i>Diploneis</i> spp.	8	4	4	4		4			2	4	1					
<i>Zannaria minor</i>	6	1	2			3			1							
<i>Eunotia</i> sp.																
<i>Fragilaria capucina</i>	2	3	7			13					1					
<i>Fragilaria contorta</i>	26	8	1			9					9	2				
<i>Fragilaria contorta</i> v. <i>nodosa</i>	23	8				4		10			6	28				
<i>Fragilaria plana</i>	9	1						2	2	1						
<i>Fragilaria</i> sp.																
<i>Fritschiea vulgaris</i>																
<i>Gyrophorus annularis</i>	1							1			1					
<i>Gyrophorus clavatus</i>		5	3													
<i>Gyrophorus graniticus</i>	2	3	2			6	1	6			7					
<i>Gyrophorus minutus</i>			2				1									
<i>Gyrophorus peruvianus</i>	4	9	10			11		3	1		2					
<i>Gyrophorus</i> sp.					1						1					
<i>Gyrophorus tridentatus</i>								9	2		13					
<i>Gyrosigma</i> spp.	7	10	19			2	19	2			1					
<i>Hantzschia amphioxys</i>	2	1							1							
<i>Hantzschia thuretae</i>	1						2	1		1	2					
<i>Merdion circinatum</i> v. <i>constrictum</i>					1											
<i>Nanidea americana</i>																
<i>Nanidea kessleri</i>	1															
<i>Nanidea septata</i>																
<i>Nanidea clematis</i>																
<i>Nanidea nigroviridis</i>	1	1														
<i>Nanidea contracta</i>																
<i>Nanidea cryptopeltis</i>								1		1	5	5				
<i>Nanidea capitata</i>	1				2	1		4	1				1	30	30	
<i>Nanidea digenitula</i>	1															
<i>Nanidea algivora</i>	9	2	8	1		3										
<i>Nanidea gallica</i>																
<i>Nanidea griffithiana</i>	1															
<i>Nanidea hastis</i>																
<i>Nanidea heterocy</i>	2		1					14								
<i>Nanidea levigata</i>	2	2	1				2		2		1					
<i>Nanidea mucicola</i>	2		2	1	3		5		1	1	2	3				
<i>Nanidea placenta</i>																
<i>Nanidea pupula</i>	5	1	1			5										
<i>Nanidea pusilla</i>	1															
<i>Nanidea rugosa</i>	1	3	58	1	2	2					1	1				
<i>Nanidea radiosa</i>	3						5			2		4				
<i>Nanidea rhytidophylla</i>						1										
<i>Nanidea</i> spp.								1	1		1					
<i>Nanidea trivialis</i>											2					
<i>Nanidea viridis</i> v. <i>costellata</i>	2	2	2			4										
<i>Nediomia effusa</i>	1							1								
<i>Nediomia amplissima</i>									2							
<i>Nediomia iridis</i>	1															
<i>Nittakia teretis</i>	1															
<i>Pinnularia arcuosa</i>						2		1								
<i>Pinnularia horrida</i>	1	1				1										

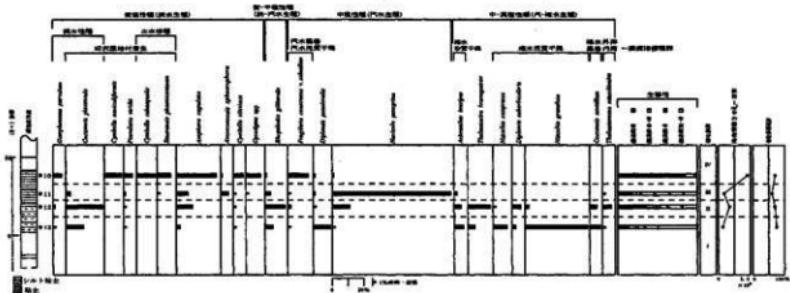
表8 善田傍示ヶ崎遺跡における珪藻分析結果（1）

<i>Pinnularia brevistriata</i>	2					1										
<i>Pinnularia glabra</i>	3	2					1									
<i>Pinnularia intertexta</i>	2															
<i>Pinnularia lundii</i>			2													
<i>Pinnularia major</i>	2					2	1									
<i>Pinnularia microstoma</i>	5					1										
<i>Pinnularia subrosea</i>	1	1						2	1							
<i>Pinnularia sp.</i>		1				1										
<i>Pinnularia spp.</i>			1	1												
<i>Pinnularia viridis</i>	9	7	4	1			11	3	1	1	2	2	2			
<i>Rhoicosphaera abbreviata</i>	1	1	2	2	3			2	1	1	3	1	1			
<i>Rhopalalia glabra</i>	1			1												
<i>Sarcocystis acuta</i>									1							
<i>Sarcocystis lamellosigera</i>		1														
<i>Sarcocystis planctonica</i>	7	1	2	1	1	17	1									
<i>Sarcocystis simili</i>							1									
<i>Sphaerotilus nitens</i>															1	
<i>Sphaerotilus sputifer</i>																
<i>Sphaerotilus sputifer</i>																
<i>Sphaerotilus sputifer</i>																
黄-赤藻孢子 (淡水生種)																
<i>Rhizopeltis gibberula</i>	6	16	9	31	30	2	10	30	12	8	17	25		7	3	
中藻孢子 (淡水生種)																
<i>Diploneis pseudalis</i>						9	50	2	3	1	26	5	17			
<i>Fragilaria constricta</i> v. <i>tabularis</i>	119	22	20			2	26	1	5	1	10	21				
<i>Neurocoleus ericeticus</i>	1	8	15			1	7	1	2	2		2	1			
<i>Neurocoleus maculatus</i>	8	9	6	1	6	6				2		1	1			
<i>Neurocoleus peregrinus</i>	25	25	2	1	1	2	212	27	2	197	18			3	5	
<i>Neurocoleus variegatus</i>				2	5				1	1		1	2	6	3	
中-真核生物 (淡水生種)																
<i>Achnanthidium brevis</i>	1	1	2	31				6	11	15	1	3	20		18	8
<i>Achnanthidium delicatulum</i>		1	1	1								1	1			
<i>Actinophorus denudans</i>									2							
<i>Actinophorus subtilis</i>																
<i>Ankistrodes californicus</i>																
<i>Bacillaria paradoxa</i>																
<i>Coleosira peronaeus</i>	1		1			2		1	1	1		1				
<i>Coscinodiscus acutulus</i>	2	1	12	44				11	16	1	8	19		2	11	6
<i>Cyclotella striata-stipitata</i>			43	1					1			9				
<i>Diploneis tabularis</i>	2								1	11		2	3			
<i>Diploneis tenuis</i>																
<i>Diploneis tabularis</i>	17	11	2	5	3			13	6	6	14	2				
<i>Fragilaria krestoviana</i>	5	2														
<i>Fragilaria pulchra</i>																
<i>Gymnodinium nivalis</i>						6				1		1		1	6	
<i>Neurocoleus capitanii</i> v. <i>angustior</i>	2	1	10	2	6			9	6		15	6				
<i>Neurocoleus elongatus</i>	5	10	7					4	2		4	2				
<i>Neurocoleus elongatus</i>																
<i>Neurocoleus marinus</i>						1	6									
<i>Neurocoleus nivalis</i> v. <i>spinosus</i>	2	4	11						2							
<i>Neurocoleus nivalis</i>																
<i>Neurocoleus sellarum</i>					5	1	1	1		3		3	2			
<i>Neurocoleus sp.1</i>										3						
<i>Neurocoleus sp.2</i>					2	6										
<i>Nitzschia acuminata</i>	2	1							3							
<i>Nitzschia ericeticus</i>																
<i>Nitzschia compressa</i>						15	4			2	21		37			
<i>Nitzschia compressa</i> v. <i>angustata</i>						1										
<i>Nitzschia granulata</i>	2	2	2	83	28			6	96	1	16	128	1	6	12	28
<i>Nitzschia longissima</i>						14	22		1	3		11				
<i>Nitzschia longissima</i> v. <i>victoriae</i>	3	1	2	1	1	1		1	1		2					
<i>Nitzschia plana</i>	1		1					1								
<i>Oscillatoria</i> spp.					2	2										
<i>Peridia nitens</i>						1										
<i>Rhopalodia muscosa</i>	3				3			6	2		2	4				
<i>Thalassiosira nitrozoides</i>	1	5	2		3			1	13	1	2	10				
<i>Thalassiosira longipes</i>	2	8	3		5			34	11	1	21	3				
真核生物 (淡水生種)																
<i>Actinophorus</i> spp.																
<i>Neurocoleus</i> spp.																
<i>Neurocoleus</i> spp.																
合計	426	203	325	326	308	325	324	329	312	328	345	317	2	18	102	102
未定	9	10	18	15	6	12	5	8	13	2	11	7	0	1	2	3
缺片	213	165	119	79	99	152	235	138	104	325	98	56	35	121	254	291
算出1cm ² 中の微細密度	1.5	1.5	5.5	6.1	3.2	9.1	1.8	3.5	1.4	3.9	8.7	7.2	6.0	6.0	1.9	
$\times 10^4 \times 10^4$																
平均微細存率 (%)	67.1	64.7	74.2	81.6	76.2	68.8	58.3	71.6	76.9	50.4	78.4	85.3	-	-	29.2	27.4

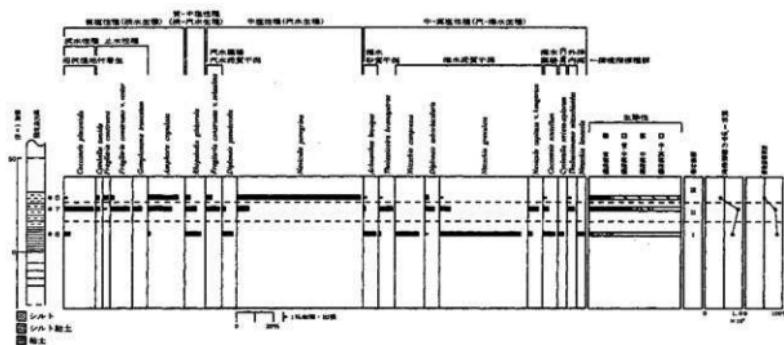
表9 善田傍示ヶ崎遺跡における珪藻分析結果(2)



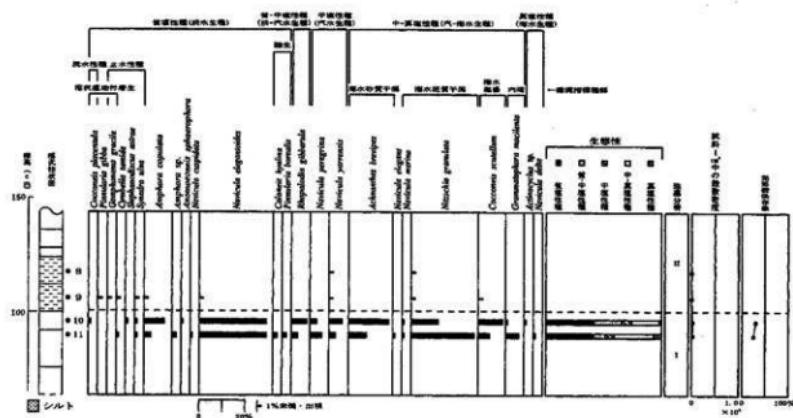
挿図28 善田傍示ヶ崎遺跡第1トレンチにおける主要珪藻ダイアグラム



挿図29 善田傍示ヶ崎遺跡第2トレンチにおける主要珪藻ダイアグラム



挿図30 善田傍示ヶ崎遺跡第4トレンチにおける主要珪藻ダイアグラム



挿図31 善田傍示ヶ崎遺跡第5トレンチにおける主要珪藻ダイアグラム

図 版



善田傍示ヶ崎遺跡第1トレンチ馬形出土状況



善田傍示ヶ崎遺跡第4トレンチ人形出土状況



善田傍示ヶ崎遺跡第1トレンチ遺物出土状況



善田傍示ヶ崎遺跡第5トレンチ完壊状況

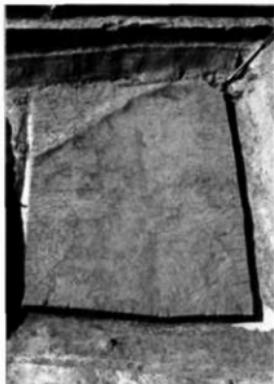


善田傍示ヶ崎遺跡第5トレンチ土器出土状況



青谷上寺地遺跡第2トレンチ完壊状況

図版 2



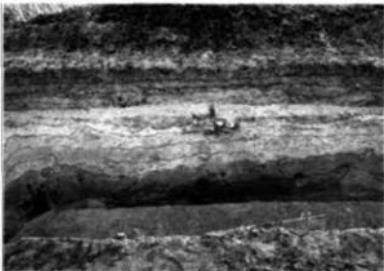
青谷上寺地遺跡第3トレンチ畦畔検出状況



大坪岸ノ上遺跡第4トレンチ完掘状況



大坪岸ノ上遺跡第1トレンチ遺物出土状況



大坪岸ノ上遺跡第9トレンチ南土層



大坪岸ノ上遺跡第9トレンチ遺物出土状況



大坪岸ノ上遺跡第9トレンチ完掘状況

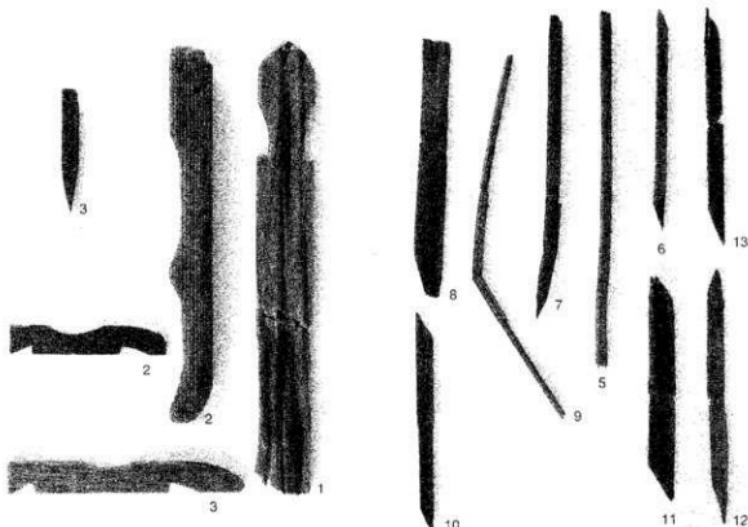


河原下畠田所在遺跡完掘状況



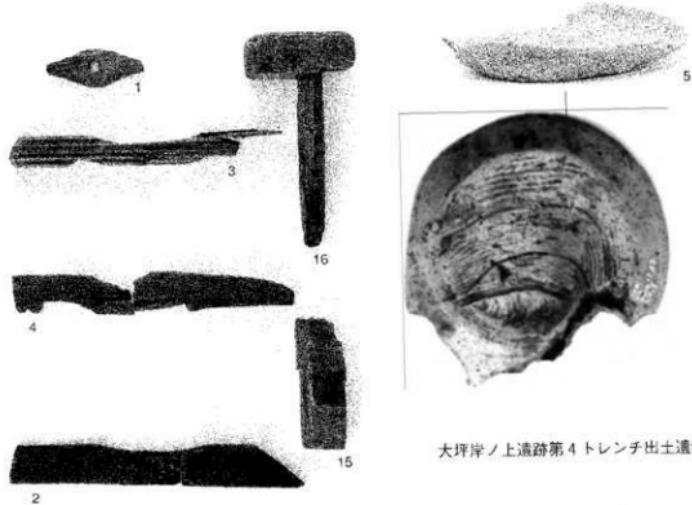
善田傍示ヶ崎遺跡第1トレンチ出土遺物

図版 4



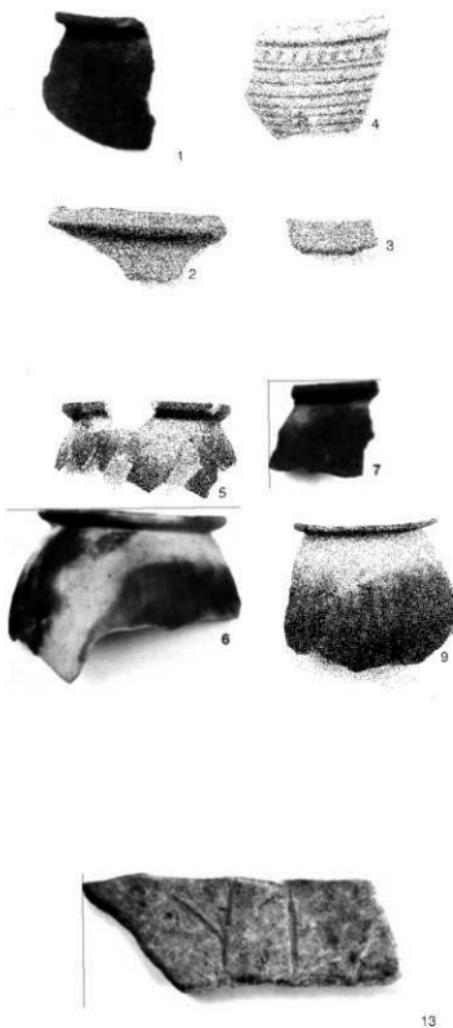
善田傍示ヶ崎遺跡第2・第4トレンチ出土遺物

善田傍示ヶ崎遺跡第5トレンチ出土遺物



大坪岸ノ上遺跡第4トレンチ出土遺物

善田傍示ヶ崎遺跡第5トレンチ出土遺物



大坪岸ノ上遺跡第9トレンチ出土遺物

報告書抄録

ふりがな	とっとりしないいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	鳥取市内遺跡発掘調査報告書							
副書名	善田傍示ヶ崎遺跡、青谷上寺地遺跡、河原下飯田所在遺跡、大坪岸ノ上遺跡							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	森 佳樹 加川 崇							
編集機関	鳥取県教育委員会							
所在地	〒680-8571 鳥取県鳥取市尚徳町116番地 TEL 0857-20-3367							
発行年月日	2005年3月18日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
市町村	遺跡番号		°	'				
善田傍示ヶ崎遺跡	鳥取県鳥取市青谷町 善田字平田前	31201	青谷 1-438	35°30'38"	133°59'52"	20040415~ 20040617	279	学校建設
青谷上寺地遺跡	鳥取県鳥取市青谷町 青谷字大茨	31201	青谷 1-82	35°30'54"	133°59'53"	20040622~ 20040622	144	住宅建設
青谷上寺地遺跡	鳥取県鳥取市青谷町 青谷字大茨	31201	青谷 1-82	35°30'54"	133°59'51"	20040713~ 20040717	4	下水道事業
青谷上寺地遺跡	鳥取県鳥取市青谷町 青谷	31201	青谷 1-82	35°30'44"	133°59'44"	20040726~ 20040829	144	学校建設
青谷上寺地遺跡	鳥取県鳥取市青谷町 露谷	31201	青谷 1-82	35°30'29"	133°59'42"	20040902~ 20040906	5	個人住宅
河原下飯田所在遺跡	鳥取県鳥取市青谷町 河原字下飯田	31201	青谷 2-8	35°28'03"	134°00'59"	20040824~ 20040825	10	排水処理施設建設
大坪岸ノ上遺跡	鳥取県鳥取市青谷町 大坪字岸ノ上	31201	青谷 1-402	35°29'31"	134°00'40"	20041117~ 20050218	212.4	ほ場整備
所 収 遺 跡 名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
善田傍示ヶ崎遺跡	散布地	奈良	木器窓り	木製祭具	試掘調査として実施			
青谷上寺地遺跡	集落跡	弥生	水田畦畔	弥生土器 土師器	試掘調査として実施			
河原下飯田所在遺跡	散布地	中世		土師器	試掘調査として実施			
大坪岸ノ上遺跡	散布地	弥生・中世	ビット、溝状遺構	弥生土器 土師器	試掘調査として実施			

平成16（2004）年度
鳥取市内遺跡発掘調査報告書

平成17年3月 印刷・発行

編集・発行 鳥取市教育委員会
印刷所 勝美印刷株式会社 鳥取支店
